

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

つつじが丘

豊橋校区史

15

Tsutsujigaoka







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ つづきが丘



美しい街並み





集い
みんなの公園
やすらじ



つつじが丘小学校



明るく



あいさつ運動



がしこし



たしまし



運動会



カッター訓練



朝のかけあし

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
つつじが丘校区総代会長

白 井 栄 一

つつじが丘校区は、平成7年に誕生した市内で一番新しい校区です。土地区画整理事業内の10町に東三ノ輪町を加えた11町で発足しました。

発足当時は、住む人も、街並みも、全てが新しい中で、私たちは、創造的な人づくり、町づくり、校区づくりを柱に、皆さんとともに取り組んできました。試行錯誤の連続でしたが、最近では、いろいろな行事や各団体の活動を通して、住民相互の親睦や連帯感が深まってきたように思われます。さらに、校区の皆さんの安心安全を守る防犯パトロール隊や、河川や公園の環境美化を目指す愛護活動など、自主的活動も活発に行われるようになりました。

校区が設立されて10年余、創造から充実の時期に入りました。この時に、むかしを偲び、今を知る「校区のあゆみ」が刊行されたことは大変意義のあることだと思います。これを生かして、この校区がより安心安全で「住んでよかった、住んでみたいつつじが丘」へと発展を続けるよう、お互いが助け合い、励ましあって歩もうではありませんか。

最後になりましたが、「校区のあゆみ」の編集にご協力いただいた校区の方々、編集委員の皆さんのご苦勞に対し、心から感謝とお礼を申し上げます。

第1章 自然と環境

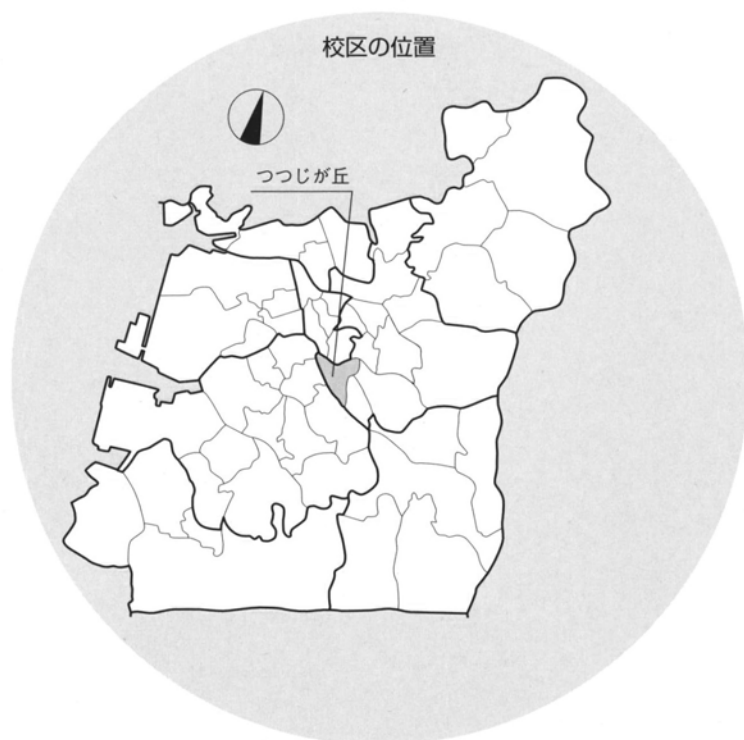
1 土地のようす	7
(1) 位置と概要	7
(2) 地形と地質	7
(3) 川と池	8
2 気候と災害	9
(1) 気候	9
(2) 風水害	9
(3) 竜巻	10
(4) 地震	11
3 自然	12
(1) 植物	12
(2) 小動物	13

第2章 歴史と生活

1 校区の歴史	14
(1) 縄文時代～江戸時代	14
(2) 明治時代～昭和時代	16
(3) 「つつじが丘校区」の誕生 〈豊橋福岡東部土地区画整理事業〉	17
2 校区の産業とくらし	21
(1) 商業	21
(2) 工業	23
(3) くらし	23
3 校区の活動	29
(1) 校区の要・総代会	29
(2) 校区を支える委員・団体の活動	30
(3) 校区を愛する自主活動	34

第3章 教育と文化

1 学校教育	37
(1) 寺子屋—教育の先覚者 岡田兵吉	37
(2) 学校の始まり	38
(3) つつじが丘小学校の誕生	38
(4) 東部中学校と中部中学校	40
(5) 幼児教育	42
(6) 松操高等女学校	43
2 社会教育	44
(1) 青少年の健全育成	44
(2) つつじが丘児童クラブ	44
3 信仰と文化財	45
(1) 信仰	45
(2) 文化財	47
4 将来へ向けて 児童の作文より	50
年表	51
編集後記	52



第1章 自然と環境

1 土地のようす

(1) 位置と概要

平成7年(1995)に誕生したつつじが丘校区は、豊橋市の中心部に位置し、北に国道1号、南にJR東海道線・東海道新幹線、東に殿田川・幸公園、西に山中川・柳生川に囲まれた総面積約1.64km²の新しい校区である。

校区を形作る町内会は、従前からの東三ノ輪町(三ノ輪町字本興寺)と土地区画整理事業によって平成7年に誕生した、佐藤一丁目・佐藤二丁目・佐藤三丁目・佐藤四丁目・佐藤五丁目・つつじが丘一丁目・つつじが丘二丁目・つつじが丘三丁目および佐藤町オノ神とサン・コーポラス佐藤の11町である。なお、校区名「つつじが丘」は、豊橋市の花「つつじ」からとった。

校区内の様子を見てみよう。国道1号・殿田川・山中川に囲まれた東三ノ輪町は、幹線道路の向山大池線沿いの商業ゾーンと国道1号沿いの小規模事業ゾーン以外はほとんどが住宅地域となっている。土地区画整理事業施行区域外であったため、幹線道路から一步中

に入ると道路は狭く住宅が密集し、乗用車一台通るにも困難な所もある。

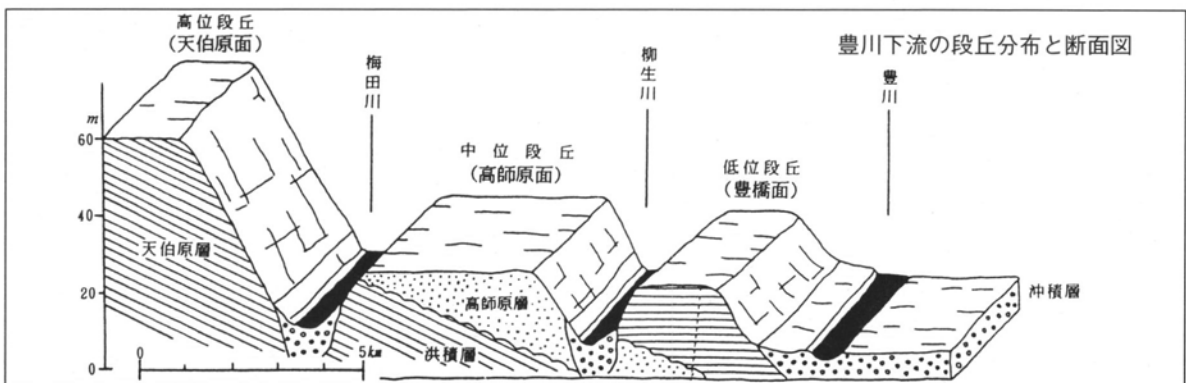
土地区画整理事業によって形作られた区域を見ると、幹線道路の石巻赤根線以西は事業所が多く住宅は少ない。それに比べて校区内を東西に走る石田線を始め幹線道路沿いは、商業・事業所ゾーンとして賑わいを見せている。夜ともなると街並みは煌々と明るく、最近では豊橋の副都心といわれている。それ以外の多くは閑静な住宅街となっている。

(2) 地形と地質

つつじが丘校区の地形は大きく二つからなる。東三ノ輪町は国道1号から山中川・殿田川方向に傾斜し、区画整理した地域はJR東海道線側が高く殿田川・柳生川に向かって低くなっている。

校区の大半を占める区域は高師原台地と呼ばれる地形のところにある。土地区画整理事業施行前は、南側のJR東海道線寄りの高い所が畑地であった。川沿いの低地には水田もあったが、大部分は排水不能の湿地であった。

こうした地形は豊川によって形作られたと



いう。今から約20万年前の豊川は、現在の豊橋市街地付近を通り抜け、太平洋に向かって流れていた。このことは豊川上流のレキ（小石）が渥美半島の太平洋側で見られることから分かる。やがて渥美半島が盛り上がり、天伯の台地ができた。その結果、豊川はより低い三河湾へと流れるようになった。その豊川の河岸段丘として形成されたのが高師原台地である。高師原台地は今から約2万年から20万年ぐらい前の第四紀洪積地の時代に堆積した地層なので第四紀洪積層と呼ばれている。

大小さまざまな小石の混じったレキ層、黄色味を帯びたシルト層などが堆積されていて、全国的に有名な高師小僧もこの地層に分布している。つつじが丘校区の殿田川―柳生川以南は、この高師原台地に含まれている。（池田芳雄氏「豊川市史」より）

(3) 川と池

川は昔から人間の生活に無くてはならないものとされてきた。人々は川の恩恵を受けて文化や歴史を発展させてきた。幸いにもつつじが丘校区には山中川・殿田川―柳生川が流れている。また、長三池とそこから流れ出る長三川もある。その歴史をたどってみよう。

① 柳生川

柳生川の上流域は、いくつかの支流に分かれている。それらを大きく分けると、一つは内山川から山中川―柳生川と下っていく水系、もう一つは殿田川―柳生川へ下る水系である。

内山川から山中川へ下る水系は、静岡県境の山々から湧き出る沢水を集めて内山川となり、宮前池・利浜池を通り、長尾池から流れ出た地藏川と合流している。さらに、影岩池・上庄池を通り、岩鼻橋下流から山中川となる。

一方の殿田川は、静岡県境の山々の沢水が流入している唐沢池から流れ出て、途中で北

殿田川、南殿田川、長三川などの各支流と合流する。

山中川と殿田川は、三ノ輪町字本興寺・佐藤一丁目・向山町字水車の境で合流して柳生川となる。ずっと下って柳生川運河に至り三河湾へ流れ出る。地元の古老の中には、合流地点に近いところを石田川と呼ぶ人もいるが、柳生川が正式名称である。合流地点の川幅は約20mで、平常時の水量は、川底が見える程度の深さである。やや深みでは放流されたコイが群れ泳ぎ、浅瀬では小魚が泳ぎ回っているの見える。

② 長三池と長三川

豊橋屈指の大きさを誇る長三池とその周辺は、土地区画整理事業によって整備され、「幸公園」と命名され人々の憩いの場として親しまれている。

その昔の長三池は、現在の2倍近くの面積を持つ農業用のため池であった。池の周囲は複雑に入り組み、ガマやヨシが生い茂り、コイやフナが悠然と泳ぎ、池底にはウナギやナマズが住み着き、モロコやメダカなどの小魚が群れ泳ぐ自然に満ち溢れた池であった。漁業権を持つ人でなければこれらの魚を獲ることはできなかったが、それでもここは近隣の人々の絶好の釣り場でもあった。年に一度、田に水を流す必要が無い稲刈りの後に水門を開き、水がえ・底ざらえを行った。

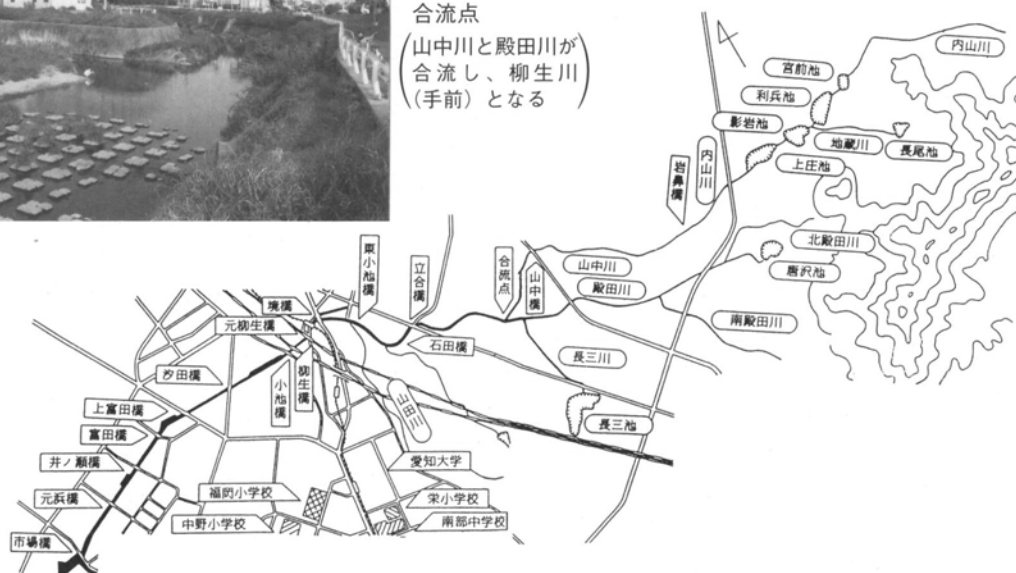
また、川幅5～6mの長三川は、長三池の余った水を流すために造られたもので、平常時の水量は少なく、両岸は雑木が生い茂って川面を覆い、人が川に入るのを拒んでいた。500mほど北に流れて殿田川と合流する。

③ 今は無い宮沢池と中柴池

土地区画整理事業によって埋め立てられ、今では全く面影も無いが、その昔からここに住む人々には無くてはならない大切な池が、現在の佐藤五丁目地内に幾つかあった。



合流点
(山中川と殿田川が
合流し、柳生川
(手前)となる)



特に、太古の昔から清水がこんこんと湧き出る宮沢池は、常に満々と水を湛え、あくまでも透明で、住民の飲料はもちろん生活用水としてもかけがえの無い池であった。この池はまた、動物たちの水飲み場であり、水鳥たちの生息地でもあった。そして住民にとって絶好の狩猟の場であったことが、この近くから狩猟に使った「石の鎌」が多数見ついている事からも分かる。なお、池を埋め立てた所にできた佐藤公園は人々の憩いの場として親しまれ、公園の一角には宮沢池のあったことを示す石碑が建てられている。

もう一つ、宮沢池の近くの高台に農業用ため池の中柴池と空池と呼ばれる池があった。空池は中柴池と土管で繋がれ、水の必要な時期だけ灌水し、中柴池の水が不足した時に通水して水を補ったという池である。

2 気候と災害

(1) 気候

豊橋市は、南方を太平洋の暖流が流れ、東・北の二方を山脈に囲まれているため、年

間平均気温が15～16℃と比較的温暖である。また、年間降雨量は、全国平均より少なく平成17年は1,044mmであった。

特徴として冬季に北西の季節風「三河のからっ風」が吹き、ひとしお寒さを感じる。しかし、雪はまれにちらつく程度で積雪することはあまり無く、乾燥した天気が続く。逆に夏は海からの湿った風が吹き込み雨が多く、湿度が高い。

(2) 風水害

昔からこの地方を襲った風水害は数多くあったが、その詳細な記録はほとんど残っていない。ここでは、当地方の風水害で記録に留められている最近のものに限って記述する。

① 三河豪雨

明治元年(1868)、長三池の堤防が決壊して大洪水になり、佐藤町字北島にあった八幡社が流出した。

② 13号台風

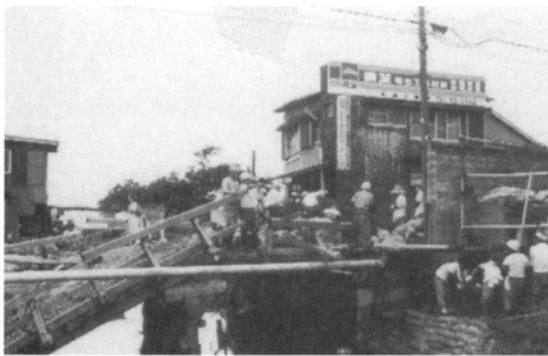
昭和27年(1952)9月15日、当地方にも大被害をもたらした。

③ 伊勢湾台風

昭和34年（1959）9月26日、当地方にも大被害をもたらした。

④ 七夕豪雨

昭和49年（1974）7月7日にこの地方を襲った豪雨から「七夕豪雨」と呼ばれている。この日の豊橋の時間降雨量は、17時-25.5mm、18時-52mm、19時-40mm、20時-53mmという豪雨となった。7日の総雨量は257mmに達した。このため校区内を流れる殿田川では、茶屋橋、下茶屋橋の二つの橋が流され、たまたま橋の上を通りかかった乗用車が水に吞まれ、運転していた人が死亡するという不幸があった。



七夕豪雨により損壊した橋

(3) 竜巻

平成11年（1999）9月24日に発生した竜巻は、つつじが丘校区にも人的・物的に大きな被害をもたらした。午前11時5分頃、野依町付近で発生した竜巻は、つつじが丘校区の西側部分を巻き込みながら市街地を北北東に進



市役所で撮影された竜巻

み、11時18分頃には豊橋市役所東側を通過、11時21分豊川市境、11時28分東名高速道路豊川インターチェンジ東側を通過、11時30分頃一宮町（現豊川市）長山まで達して消滅した。

竜巻の移動距離は約19km、移動速度45km/h、回転は左回りで、被害の幅は最大550mであった。竜巻の規模は、藤田スケール「F3」（約5秒間の平均風速が70~92m）で、壁が押し倒され住家が倒壊する強さであった。



被害の様子（つつじが丘一丁目付近）

人的被害 校区内の医療機関で治療を受けた人は7人であったが、校区外の医療機関で治療した人もあったと思われる。また中部中学校が竜巻の直撃を受けたため本校区の生徒も多数が負傷した。いずれも負傷の程度、人数は確定できないが死者がなかったことは不幸中の幸いであった。なお、豊橋市全体では重傷15人、軽傷400人にのぼった。

物的被害 住宅の被害として、全壊は無かったものの屋根や窓ガラスの破損は多大で、これに伴って住宅内の家具・畳など使用不能の被害が出た。その他の被害では物置やフェンスの倒壊などが多数あった。またライフラインでは、電柱の折損や断線に伴う停電、電話ケーブルの切断による不通、信号機や交通標識の倒壊による交通麻痺などの被害が多数出た。なお、豊橋市全体の住宅被害は全壊40棟、半壊309棟、一部破損1,980棟にのぼった。

校区の活動 本校区では、つつじが丘一・二

丁目と三丁目の一部が被害を受けた。午後4時30分、第1指定避難所であるつつじが丘校区市民館に避難所が開設された。これに伴い総代会は校区防災会として活動を開始し、消防団と協力して被害状況の把握、被災地への支援物資の輸送・配布を行った。また被災者救援の拠点になったつつじが丘3町集会所に発電機・投光機を設置し、住民の相談に応じたりした。この日の、消防団の迅速かつ適確な行動は、校区の人々に感銘を与えた。

避難所の校区市民館には2世帯4人が避難し、翌朝まで和室で過ごした。なお、豊橋市からの支援物資は非常食150食、毛布26枚、シート80枚であった。

(4) 地震

① 東南海地震

発震 昭和19年(1944)12月7日午後1時36分頃

規模 M=8(名古屋で震度5)

震源地 熊野灘沖

震源の深さ 極浅(0km~30km)

震域 九州から関東、東北地方、北海道の一部の広範囲にわたって人体に感じ、特に紀伊半島東部、伊勢湾周辺、熊野灘沿岸で振動が激しかった。

被害状況は戦時中で不明だが、愛知・静岡・三重の各県で被害が大きく、豊橋でも甚大な被害が出た。当時東三ノ輪町に住んでいて、その時の様子を知る人に聞いてみた。

「その日、5年生の私は、たまたま風邪で学校を休み寝ていた。突然どんと体が突き上げられたような感じで目が覚めた。体が大きく揺れ、めまいのような感じがした。頭の近くに神棚が落ちてきて地震だと気づいたが、立つこともできず何とか這って外に出た。地面に座ったまま家を見ると、家全体が左右に波打ち、屋根瓦は逆立ち、建具は全て菱形に

なり、障子は破れ、×字に紙を張ったガラスは全て割れてぶら下がった。揺れは収まったものの家は傾き、家財道具は散乱し足の踏み場も無かった。家の近くの製糸工場のレンガ造りの太い煙突が中程で崩れ落ちてしまった。」

② 三河地震

発震 昭和20年(1945)1月13日午前3時38分頃

規模 M7.1(名古屋で震度4)

震源地 渥美湾、震源の深さ 0km

震域 中国・四国地方から関東地方まで人体に振動を感じたが、規模は大きくなかった。

愛知県下では矢作川下流域の幡豆・碧海郡方面を中心に被害が集中し、死者約2,000人、住家全壊約5,000戸に達した。この地方の被害は、一月前の東南海地震とともに戦時中のため、詳細は不明であるが、大きな被害が出た。この地震を体験した地域の人々の話をまとめてみよう。

「一月前の地震の余震もほとんど無くなって安心していたら、真夜中にどかんと来て本当にびっくりした。この地震は余震が多く、それも揺れが大きく怖くて家の中には居られなかった。そこで、家の外に竹やわらで『地震小屋』を作って布団などを運び込み寒さを凌いだ。必要なものは余震の合間を見て家の中から持ち出した。夜には、余震の来る前には必ず震源地の方角で青白い発光が見え、その数秒後に低い地鳴りを伴ってぐらっと来たことを覚えている。」

③ 愛知県東部を震源とする地震

発震 平成9年(1997)3月16日14時51分頃

規模 M5.8(豊橋市向山で震度5強)

震源地 豊橋市東部

震源の深さ 39km

被害は、豊橋全体で人的被害が軽傷3人、住宅被害が一部損壊5棟、非住家被害が26棟

などであった。震源地が本校区の直近にかかわらず校区内での被害は無かった。

3 自然

本校区は、約20万年位前に形作られた洪積台地の高師原の一角にある。明治以後、旧陸軍の演習場であった高師原は広大な原野で、至る所に池・湿原があり、丘が起伏し、洪積台地の典型的な自然環境であった。丘にはクロマツを始めアカマツやヒサカキがあり、ところどころにササやススキも見られた。また、マツムシソウ・キキョウ・オミナエシ・ハギ・アキノキリンソウ・センブリなどの花が咲き乱れ、池畔や湿地には食虫植物や湿性植物が夏・秋を彩っていた。

戦後は民間に払い下げられ、農地として開墾された場所が多い。昭和43年（1968）、豊川用水が完成してからは、土地が平地化され、田畑や住宅地に一変した。さらに、土地区画整理事業によって河川の改修、住宅地・道路・公園等の造成が行われ、昔ながらの自然はほとんど姿を消した。街路樹や公園内の整然とした植樹ばかりとなったが、現在でも一部貴重な植物が保存されている。



昔の高師原

(1) 植物

① ナガバノイシモチソウ

豊橋市指定天然記念物（平成5年12月3日指

定）。自生地は佐藤町字池下（面積2,500㎡）。

ナガバノイシモチソウは、モウセンゴケ科の一年生の食虫植物で、細長く伸びた葉の表面に密生した繊毛があり、この先端から粘液を分泌して小動物を捕らえ栄養とする。5月頃芽生え、その後10～15cmに成長し、7～8月頃に1cmほどの小さなピンク色の花が咲く。

熱帯に広く分布するが、日本では非常に貴重な植物で宮崎・千葉・茨城・愛知県のみで自生が確認され、このうち千葉県と宮崎県は国の天然記念物に指定されている。愛知県の自生地は当地のほか、豊明市と武豊町にあり、どちらも県の天然記念物に指定されている。日本で保護すべき植物種をまとめた「レッドデータブック」では、絶滅危惧1B類に位置づけられている。

校区にある自生地のナガバノイシモチソウは、近年減少しており、生育環境の変化に敏感な弱い植物のため、保護していかなければならない。このため、植生維持を人為的に行い、自生地内は基本的に立ち入り禁止である。



ナガバノイシモチソウ

② 東三ノ輪町のソメイヨシノ

とよはしの巨木・名木100選。所在地は三ノ輪町字本興寺（幹周りは268.196cm、高さ16.6m、枝張り23.3m×20m。バラ科サクラ属で推定樹齢は50年以上）。

豊橋市のソメイヨシノの中では最も大きく、四方八方に枝を張り、樹形も美しい。ソメイ

ヨシノはオオシマザクラとエドヒガンの雑種である。

東三ノ輪町の児童遊園地の東側にあり、春には見事な花が咲き、花見の人々で賑わう。



ソメイヨシノ

(2) 小動物

① 幸公園とその周辺

一年を通して、幸公園では下図のような小動物を見ることができる。

② 殿田川・山中川

殿田川・山中川の合流点付近には、放流さ

れたコイのほか、フナ、カニ、ウナギ、カメ、メダカ、アメンボ、モロコなどが特に多い。また、カワウ、数種のカモ、カルガモ、アオサギ、コサギといった鳥類も多く見られる。

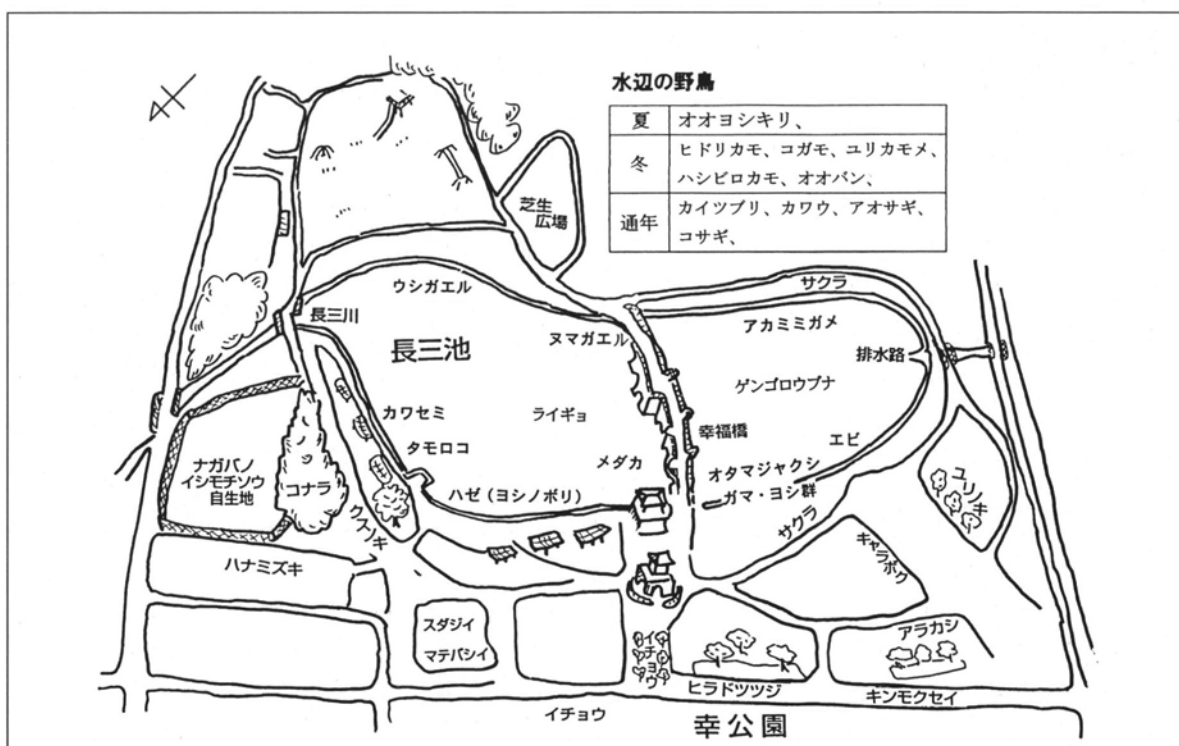
③ 市街地でも見られる生物

昆虫など ヤマトシジミ、アオスジアゲハ、ハナムグリ、ショウリョウバッタ、エンマコオロギ、ウスバキトンボ、アブラゼミなど。

野鳥 ツバメ、キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソカラスなど。



野鳥

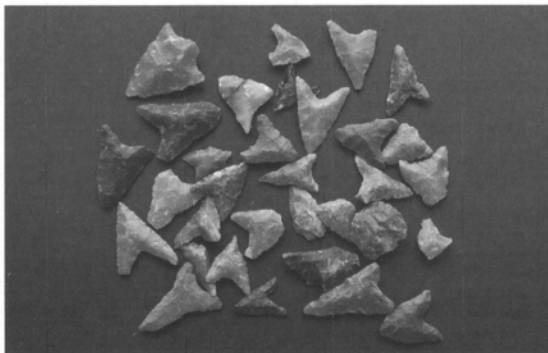


第2章 歴史と生活

1 校区の歴史

(1) 縄文時代～江戸時代

縄文時代 佐藤町字東谷（現在の佐藤五丁目）から打製石器の「石の鎌」が発見されている。当時は、ここが丘陵地帯で森林が広がり、そのくぼみは湿原湖沼となり、鳥獣類がたくさんいて狩猟の場になっていたと考えられる。



石の鎌

弥生時代 中国から稲作が伝わり、この地方では殿田川、山中川の低湿地の飯村あたりに水田があった。弥生式土器が使われ、「クニ」が作られた。柳生川に注ぐ殿田川、山中川の流域は同じ豪族の支配下にあった。

奈良時代 製塩、窯業、養蚕が行われるようになった。

平安時代 『御前落居記録』に、北は手洗・雲谷の八名郡境から南は野依・植田から高足（後の高師）・飯村・岩田などが高足の庄に含まれていたとの記述があることから、この地方は平家一族の平忠朝を領主とする高足の庄（荘）であったと考えられる。この高足の庄は、源氏が平氏を滅ぼしたときに没収し、

伊勢神宮にお礼として与えられ高足御厨（^{みくり}神宮の所領）となった。

ここで高足（高師）村について見てみよう。『建武年中行事』によると、「高足村ありて、その辺り23里にわたる。平山の大号すべて高足といい、……遠江の長谷部（白須賀）までという。」とあるように、つつじが丘校区は高足に入っていた。

また、当時、高足について歌った歌がかなり多く、高足は往来の激しい所であり、歌を作る名所でもあった。

「雲かかる たかし山の あけくれは つままと
わせる おじか鳴くなり」 源仲正（1127年）

この雲かかるたかし（高足）山とは、岩崎町の近くの松明山（^{たいまつやま}）のことを言ったのであろう。平安時代、この地方の東海道は3～4本あった。1本は本坂峠を抜ける道であり、もう1本は、飯村の熊野神社の南を通る道であり、さらに高師原を通る道があった。従って、この歌の場合、熊野神社前を通っている道が松明峠に続いていたのだろう。

鎌倉時代 当地方は、三河の国として守護が置かれ、高足荘として地頭が置かれた。

昭和になって、佐藤町字一本木（現佐藤四丁目）で壁土採掘の時に、鎌倉時代の窯跡が発見された。そこから当時の土器、焼き物（素焼き）や、その破片などが多数出土した。また、その近くに井戸らしい跡もあり、粘土練りや生活用水に使ったと思われる。

室町時代 この地方も農業技術の進歩が著しく、二毛作が行われ、すき、つるはし、とうみなども普及し、肥料として刈り草、堆肥、

人ぶん、魚肥などを使うようになった。さらに交通の要所には「市」が開かれ、行商も現れ、飯村の米などの農産物と物々交換も行われた。

当時、領主が農民に不当な要求をしたので、農民たちはこれに抵抗して、入会地や農業用水の権利を守るために団結して「惣」という自治組織を作った。現在の西口町、東幸町、旧佐藤町は、高師村に入っていて一つの「惣」を作っていた。

安土桃山時代 永禄3年(1560)の桶狭間の戦いで今川義元を破り、織田信長は徳川家康と同盟を結び、信長は尾張より西へ、家康は三河より東へ領土を広げることにした。そして家康は天正17年(1589)から、この地方の検地を行い七か条定め書を出した。下の定め書は、つつじが丘校区の入っていた高足郷(村)のものであり、貢租と夫役を行わなければならなかった。(文章は、簡略にしてある)

朱 印 定

- 1、年貢は証文どおりきちんと納めよ。殿が遠くに住んでいても5里までの所なら届けよ。
- 1、陣夫(兵役)として、200俵につき、1匹一人を出すこと。荷積は下方ますで五斗積のこと。
- 1、百姓屋しきとして100貫匁ごとに3貫文の中田をくださる。
- 1、殿のために1年に20日、代官のために働け。
- 1、四分一として、100貫文につき二人出せ。
- 1、……………
- 1、竹やぶのある者は家康に50本、地頭に50本出せ。

天正17年11月3日
高足郷 彦坂小刑部(花押)

江戸時代 慶長9年(1604)の渥美郡の慶長検地によると、田を上田、中田、下田、荒田と、畑を上畑、中畑、下畑、下下畑と区分した。

吉田藩の年貢は、五公五民であり、半分が年貢として取られた。そこで農民たちは年貢の割高な上田や上畑の耕作をやめ、新田や新畑の耕作に励んだ。そのため上田や上畑は荒れ果てたといわれる。

左藤村は1600年代の後半に新田開発が行われたため年貢が安く、隣の飯村村の人々より生活は楽であったと考えられる。30戸の農家が左藤に住み着き、一つの村を作ったのも、年貢の安い新田をねらったの村作りであったのだろう。

『二川宿・大岩加宿の研究』の中に、次のような生活状況が書かれているが、隣村のことでもあり、飯村村や左藤村の人々も同じであっただろう。

「たき物は裏山に行って松葉を集めたり、枯れ枝をとったりした。金を出して買うことはほとんど無かった。小米をうすで挽き、だんご汁にして食いのばしていた。夜は、そばこのだんご汁の中へ大根や人参を入れた。老人のいる家では、きび、あわ、そばなどを挽いた。」とある。それでも百姓たちは、日の出前から暗くなるまで耕作に励み、夜は松明を燃やしながら縄や筵を織った。女は、着物を縫ったり繕い物をした。

〔左藤村〕 昭和7年9月1日、現在の町名となった佐藤町は、江戸時代には左藤村と書か

左藤村のある農家の家計簿

天保12年(1841)

収入	米 …… 9石	水田 …… 5反
	綿 …… 4本	畑 …… 2反
	麦 …… 3石	畑 …… 1.5反
	菜種 …… 1石	畑 …… 1反
支出	年貢 …… 6石	
	生活費 …… 銀402匁3分2厘	
	農機具 …… 150匁	
	肥料代 …… 1貫7匁	

(豊橋市中央図書館所蔵)

れていた。左藤村は高足村の分村である。寛文7年(1667)野依村の左藤氏(旧姓彦坂氏で左藤家に養子)によって開発された新田村である。左藤氏は自分の氏神である八幡社を左藤村に造った。

安政5年(1858)には、30戸の家があり、人口172人であった。左藤村は高足村から分離したものの、村としての付き合いは山田村や小池村との結びつきも強かった。

〔山田村〕 山田村は江戸期から明治11年までの村名である。三河の国渥美郡のうち寛延3年の高足村差出帳に寄れば、寛永4年の開発で高足村から分かれ、188石余であった。安政5年の戸数は18戸で人数99人。明治9年の合併村願書では戸数21戸、人数96人。(徳川林政史研究所蔵)元禄6年の三州吉田領神社仏閣記では神社が1社あった。明治11年、福岡村の一部となる。

山田町は昭和7年9月1日、現在の町名となる。元は高足村福岡の一部。一部が昭和8年東小池町、同40年山田一番町～三番町、江島町、小松町、牧野町、北山町となる。

〔東三ノ輪町〕 東三ノ輪町は、「三ノ輪村史(詳細不詳)」によると、もと仁連木村字三ノ輪といわれ「本村、古事より字名を三ノ輪と称すといえども、人家は一戸も無く、明治2年頃より旧吉田藩士80余名居宅を設け、一村を開き、三ノ輪村をつくる」とある。

明治18年には、54戸、人口132人に減っている。おそらく開墾の仕事が重労働の割りに収穫が上らなかったからだろう。

字名の本興寺の由来ははっきりしないが、古老の話によると、昭和10年代後半まで、現在の本興寺バス停南付近を「弘法さん」と呼んでいたとのことから、そこに本興寺と言う寺があったとも考えられる。鷺津にある本興寺とは無縁といわれている。

(2) 明治時代～昭和時代

明治11年(1878)、左藤村は山田村・小池村と合併して福岡村になった。また、明治22年(1889)、飯村村と三ノ輪村は、岩崎村・岩田村・東田村・瓦町村・仁連木村と合併して豊岡村となった。

明治39年(1906)に豊岡村は豊橋町と合併して豊橋市となった。福岡村は同年、磯辺村・高師村・野依村・植田村・大崎村と合併して高師村となった。そして昭和7年(1932)、豊橋市と合併した。

明治になって、封建社会の士農工商の身分制度はなくなり、武士は士族に、足軽と農工商は平民となったが、そのくらしは楽ではなかった。

三ノ輪村は、明治2年頃、旧吉田藩士80戸が入植して村を作ったが、明治18年には54戸に減っている。その開墾作業は重労働であったと思われる。

明治8年の戸籍帳によると左藤村の戸数は31戸で168人が住んでいた。また明治9年、隣の飯村村は106戸で467人が住んでいた。水田面積は、飯村村が39町、左藤村が20町、三ノ輪村が4.6町、畑面積は飯村村21町、左藤村16町、三ノ輪村12町であった。

飯村村や左藤村では、米・麦・あわ・きび・ひえ・そば・いもなどを作っていた。しかし、三ノ輪村は水田が少なく、畑作中心の農業であった。明治9年頃の三ノ輪村は、いもを作らず綿花の栽培が多かった。

明治から大正にかけて飯村村や左藤村の農民が豆腐や油揚げを口にしたのは、正月やお祭りの時だけであった。魚を売りに来ても買う人はほとんどいなかった。

明治30年頃になると、二川や豊橋に多くの製糸工場ができ、三ノ輪村にも工場が造られたので、飯村・左藤のほとんどの農家で養蚕を始めた。飯村・左藤・三ノ輪などでは小学

校を卒業すると、男子は工場へ働きに行ったり、職人奉公に出たりした。女子は礼儀作法を身に付けるために女中奉公や、製糸工場で働いた。

昭和5年（1930）、世界恐慌の波がこの地方にも及んできた。キャベツを売りに行っても、肥料代にもならず、トラックを借りて売りに行けば、ますます赤字になった。キャベツ50個で、18銭のタバコが1箱買えただけだった。まゆなどを車に積んで売りに行ってもただ同然の値段をつけられた。農村の飯村や佐藤の農家の生活はまさに深刻であった。

明治の中頃から昭和の初めにかけて東三ノ輪町の東海道沿いに鍛冶屋、瓦屋、駄菓子屋などができた。また、住宅も急増し、製糸工場もでき活気が出てきた。明治19年には伝染病患者を隔離治療する『避病院』が造られた。

高師原は明治40年（1907）、陸軍第15師団が豊橋に置かれると同時に演習場として整備され、太平洋戦争の終戦まで軍用地として使用され、民間人の立ち入りはできなかった。

昭和16年（1941）12月8日、太平洋戦争に突入し、緒戦は有利に進んだが、次第に戦況が悪化した。昭和19年・20年になると連日連夜、都市という都市は空襲のため灰燼^{かいじん}に帰した。豊橋も例外ではなく、昭和20年（1945）6月19日夜中にB29の焼夷弾爆撃を受け、市街地はほとんど焼け野原になったが、この地区に被害は無かった。

昭和20年代以降、この地区の農家は、佐藤町で40戸、東三ノ輪町、山田町ではそれぞれ10戸前後であった。冬季から春季には麦・大根・らっきょうなどが作られ、夏季から秋季には冬瓜・なす・さつまいも・ごま・米が主な作物であった。これらの作物に必要な農業用水を確保するために、昔から長三池・中柴池・宮沢池などのため池が大切に管理された。また、小規模であるが、養鶏・養豚・農作業

用の牛も飼われていた。この地域は、農業に適した土壌ではなく作付け品種も限られ、これといった特産品もなかった。

昭和43年（1968）、豊川用水が通水し水不足が解消された。これに伴って農作物の栽培方法が飛躍的に改良され、作物も多種になり、白菜・キャベツ・葉タバコのなどが作られるようになった。また、ハウス栽培が盛んになるなど、多角的農業ができるようになった。



区画整理施行中（昭和58年）

(3) 「つつじが丘校区」の誕生

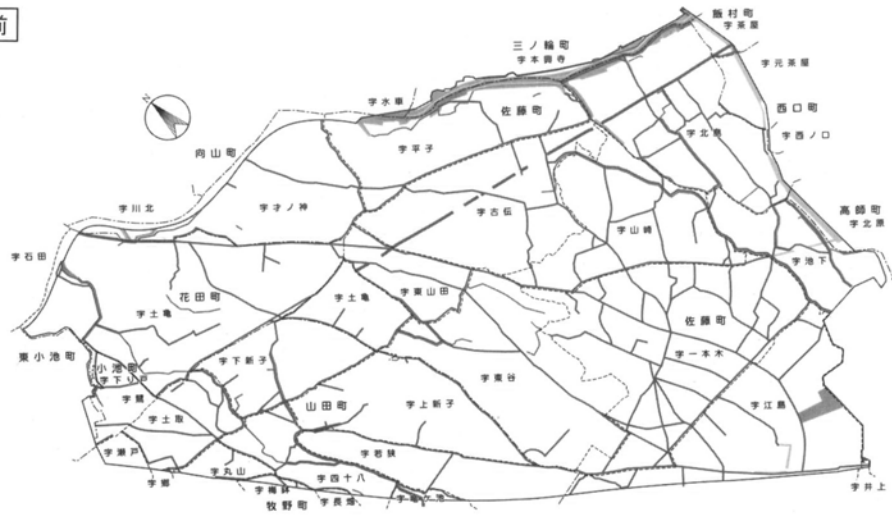
〈豊橋福岡東部土地区画整理事業〉

この事業は、土地区画整理研究会発足から数えて約30年という長い年月を経て完成した。関係者との協議、事業内容の検討、複雑な手続きなど幾多の問題を克服して、昭和51年（1976）3月9日起工式を挙げる事ができた。それから約20年、土地の整地、道路や宅地の造成、公園の築造、河川の改修、住宅や学校・市民館などの建設が進み、住民は生まれ変わりゆく『つつじが丘』に大きな期待と希望を寄せる毎日であったらう。

そして、ついに平成8年（1996）9月7日完工の日を迎え、ここに関係者の並々ならぬ努力による新しい『つつじが丘校区』が誕生した。



区画整理前



区画整理後



① 施行前の状況と目的

本地区は、南側のJR東海道本線と、北側の殿田川・柳生川に挟まれた北傾斜地で、大部分は畑地となっており、その他は低湿地で主に水田になっていた。さらに、未利用地や排水不能による湿地が目立った。また、地区の東側には、長三池から流れ出る長三川が未整理のまま殿田川に注ぎ、たびたび決壊した。地区内の排水路は、ほとんど未整備のまま低湿地や池沼に流れ込んでおり、排水施設の整備は遅れていた。

また主要道路として、前田町から石田町を経て佐藤町・江島町および牧野町へと通じていた石田線と、小池町から山田町・佐藤町・西口町そして飯村町・国道1号へと東西に通じる道路があった。この二つの道路は、山田町字東山田と佐藤町字古伝の境（現在の佐藤一丁目付近）で交差していた。きわめて狭く未整備な農道ばかりで、牛車やリヤカー一台が通れるだけの道路だった。

一方、豊橋市は交通の要衝という有利な立地条件を生かして、東三河地域の中核都市として発展を続け、人口の増加が著しかった。しかしながら、市周辺部においてはスプロール化現象による生活低下が生じ、市中心部と至近距離にある本地区をこのまま放置すれば無秩序な市街化は避けられない状況であった。こうしたことを防止し、健全な市街地を造成しようと本事業を計画した。



区画整理前の風景（昭和43年）

② 道路と街区

石巻・赤根線（一般県道・豊橋環状線） 起点を石巻本町、終点を清須町とする幅員22～38.5m、総延長約13,780mの内、地区内延長538mの道路である。地区内を南北に走る幹線道路で、東西に走る都市計画道路石田線との2路線で地区内の骨格を形成している。中央分離帯には植樹が施され、沿線には店舗が立ち並び、車の通りも多く、幹線道路としての機能を十分発揮している。また、平面的な道路に地区のシンボル“斜張橋”の存在がアクセントとなり都会的な印象を与えている。



斜張橋

石田線（都市計画道路） 起点を東松山町、終点を大岩町とする幅員20～26m、地区内延長1,756mの道路である。地区内を東西に走る幹線道路で、地区内の骨格を形成している。車の通りも多く、沿線には店舗が立ち並び、バス路線にもなっている。歩道にはベニバナトチノキが植樹され、5月には赤く美しい花を咲かせ行き交う人に安らぎを与えている。

福岡東部線（都市計画道路） 地区内を環状に走る幅員12～25m、延長2,908mの補助幹線道路である。市営オノ神住宅前付近には道路中央部分に鉄塔があるが、植樹を施すことにより、その存在を緩和している。道路植樹としては珍しい『花水木』が植えられ、春先にはピンクや白の美しい花を咲かせる。

佐藤町線（都市計画道路） 地区内環状線の

- ・土亀公園…つつじが丘三丁目
- ・若狭公園…つつじが丘三丁目
- ・平子公園…佐藤一丁目
- ・古伝公園…佐藤二丁目
- ・山崎公園…佐藤三丁目
- ・北島公園…佐藤三丁目
- ・一本木公園…佐藤四丁目
- ・佐藤公園…佐藤五丁目

- ・東三ノ輪児童公園…三ノ輪町字本興寺
(区画整理事業施行地区外)

福東緑地 JR東海道本線に沿って带状に配置された福東緑地は、東西の延長約1,500m、総面積1.2haにおよぶ緑豊かな緑地である。四季にわたりいろいろな花が咲き、赤、白、黄、緑のコントラストを演出している。区画整理地区内の緑地としては、全国的にみてもかなり大規模な緑地であり、都市景観上はもちろんのこと、騒音防止の観点から緩衝緑地としても機能するよう設計されている。



福東緑地

④ 河川の改修

- ・柳生川…幅員(18.9m)延長(98.80m)
- ・殿田川…幅員(19.4~22.5m)延長(694.68m)
- ・長三川…幅員(14.0~14.4m)延長(767.51m)

⑤ 宅地…道路築造計画に準じて整地した。

⑥ 上水道・都市ガス…本管を敷設した。

⑦ 公共下水道…当地区全域に雨水・汚水进行处理する下水道が完備した。

2 校区の産業とくらし

(1) 商業

当地区が大きく姿を変えたのは、土地区画整理事業が始まってからである。道路の造成や街区の整備が進むと、住宅の建設とともに医療、金融関係も進出、商業施設も急ピッチで造られた。特にメイン道路の石巻赤根線・石田線の沿線には自動車・ゴルフ・ホームセンター・スポーツ・衣服・書籍・娯楽などの大型店を始め、コンビニエンスストア・飲食店・各種の専門店や小売店が軒を連ね、一大商店街を形成している。夜になると街は色とりどりのネオンや照明でまばゆく輝き、市の中心街より活況を呈している。

また、東三ノ輪町は、昭和63年、向山大池線の拡幅工事の完成に伴い、沿線に各種の専門店・小売店が進出して商店街ができた。

そして、平成16年(2004)10月1日商店街のさらなる発展を目指して「つつじが丘発展会」が発足した。その発足までの苦労を発展会の現会長に振り返っていただいた。

『平成9年秋頃より、つつじが丘校区を中心とした「花が崎通り商店街振興組合」の設立の機運が高まりましたが、様々な制約のため設立を断念しました。それから6年後、平成16年に、つつじが丘校区内を対象とした発展会を作ろうと6名の発起人でスタートしました。校区内の企業・事業所に呼びかけたと



商店街



こども110番の家ののぼり

ころ、5月に60数社が参加され、名称も「つつじが丘発展会」と決め、平成16年10月1日に発足しました。

参加業種は、商業・工業・サービス業、医療、金融など多方面におよび、他に類を見ない組織ができてきました。発足間も無いこともあって試行錯誤の日々でしたが、平成17

年度に、発展会会員の所在を網羅した「つつじが丘発展会加盟店MAP」を作成しました。

また、安心安全な街づくりのために、全加盟店が警察に協力して「こども110番の家」としてプレートの配布を受けました。同時に分かり易いように「こども110番の家」ののぼりを作って各加盟店に掲揚しました。さらに、発展会MAPに「こども110番の家」を明示して、小学生全員に渡しました。そして、校区市民館には拡大MAPを掲示しました。

発展会では、今後も地域の人々はもちろん地域外の人々にも愛され親しまれる街になるよう頑張っまいります。』

なお、花が崎の地名は、入海に突き出た鼻ヶ崎を意味するという。もと渥美郡花ヶ崎村であったが、明治11年（1878）花ヶ崎村と羽

【世帯数・人口の推移】

年度	世帯数	総数	男	女
H 2	1,913	6,159	3,043	3,116
H 7	2,508	7,509	3,801	3,708
H12	3,047	8,765	4,382	4,383
H17	3,483	9,409	4,642	4,767

国勢調査各年10月1日（H17別途調査）

【事業所数】

H14「豊橋市の工業」

総数	食料品	繊維工業	衣服見回品	木材同製品	家具装備品	出版印刷	窯業土製品	鉄工業	金属製品
18	4	—	3	2	—	1	1	—	—
	一般機械	電気機器	輸送機器	精密機器	その他				
	3	1	1	1	1				

【商工業開設時期別事業所数】

H 8「豊橋市の事業所」

年度	S29以前	S30～39	S40～49	S50～59	S60～H1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8
数	14	18	49	42	86	25	17	21	17	20	20	17

【事業所数】

H14「豊橋市の商業」

卸売業	総数	繊維衣服等	飲食料品	建築材料 鉱物金属	機械器具	その他
	31	3	6	4	10	8
小売業	総数	繊維衣服身の回り品	飲食料品	自動車 自転車	家具じゅう器 家庭用機械器	その他
	87	10	23	15	13	26

田村が合併して花田村となった。明治39年に豊橋市大字花田、大正15年に花田町となった。柳生川の西岸で、現在の松山・羽根井校区であった。旧花田町字土亀（現つつじが丘一・二・三丁目の一部）までをいう。

(2) 工業

土地区画整理事業以前の校区は農業が主体であったが、東三ノ輪地区では明治初期から良質な粘土を採掘する飯村地区とともに数軒の瓦製造所ができた。この頃には、市内に15軒程の瓦屋があったと言われている。その後、昭和初期に軍都として発展しつつあった豊橋の瓦の需要増に伴い、高浜・碧南などから瓦職人が移住してきた。昭和30年代には東三ノ輪・飯村地区を中心に40軒程に増えた。

その後、量産メーカーの安価な瓦に押され、市内の瓦屋は昭和末期には17軒に減少し、現在は8軒しか残っていない。こうした状況の中で、東三ノ輪には斬新な鬼瓦を作り、伝統を守りながら豊橋瓦の復活を目指している貴重な製造業者がある。

昭和40・50年代に入ると旧土亀地区、才ノ神地区に工業製品や食品製造機器を造る工場などが創業した。なお、土地区画整理事業の進展に伴い、住宅の増加とともに各種の事業所も急増した。



瓦製造所（昭和25年頃）

(3) くらし

① 交通

道路 東三ノ輪地区を通る主な道路としては、市の中心部とこの地区を結ぶ向山～大池～本興寺～殿田橋へと通じる向山大池線と地区の北側を通る国道1号がある。

向山大池線は、戦前は牛車やリヤカーが通れるだけの道幅で曲がりも多かったが、戦時に軍関係の車両が通行するために拡幅整備された。さらに昭和60年代に大規模な拡幅工事が行われ、歩道が整備され、ケヤキが街路樹として植樹された。現在は、道路の両側には大型店や各種の商店・事業所が建ち並び繁華街となっている。

国道1号は、その昔から東海道として東西交通の重要な幹線道路であった。牛馬車、人力車の時代から、徐々に自動車の時代に入り、昭和30年頃から自動車の大衆化が進み、交通量も増加した。こうした事情から国道1号の改良が迫られるようになった。昭和27年（1952）、第一期工事が渥美郡二川町（当時）～宝飯郡音羽町間、延長約30kmで始められ、道幅を20mに拡幅し、歩道も整備して、昭和35年頃に改良工事が完了した。その後、交通量の激増に対処するため、昭和45年から昭和46年にかけて、第二期工事が行われた。この工事では、第一期改良舗装工事の際造られた歩道を縮小して、車道の拡幅および中央分離帯の設置工事を行った。

本地区を通る国道1号は延長約400mと短く、沿線には他地区のような駐車場のある大型店舗は無く、事業所の規模も大きくない。

路線バス／平成18年4月現在

- ・西口線 豊橋駅前～才ノ神～才ノ神住宅前～佐藤西～佐藤東～西口
- ・飯村岩崎線 豊橋駅前～大池～本興寺～本興寺東～殿田橋～赤岩口
- ・二川線 豊橋駅前～（国道1号）～山中橋～殿田橋～神鋼電機

鉄道

J R 東海道本線 旧東海道線の浜松一名古屋間が開通したのは明治21年(1888)9月1日であった。東海道線全線の開通は翌22年である。線路は本地区の南部をかすめて通っており、この辺は丘陵地で建設にあまり問題は起きなかったが、市街地を通る地区ではいろいろトラブルがあったようである。人家の多い二川地区では反対も多く、明治29年まで駅舎ができなかった。

東海道新幹線 昭和39年(1964)10月1日、戦争中に計画された弾丸列車が東海道新幹線となって開通した。この地区では、新幹線は東海道本線と平行して走っており、これは全路線中でも珍しいケースだということである。**つつじが丘に新駅を** 東海道本線の中でも豊橋駅と二川駅の間は、6.9kmと長く、新駅建設を望む声が常にあがっていたことから、土地地区画整理事業は、つつじが丘三丁目に新駅建設用地を確保しながら進められていった。

土地地区画整理事業完了後は、自動車を利用する人が増え、交通渋滞や交通事故の多発、さらには、排気ガスによる環境の悪化などの問題が生じてきた。

そして、ついに、つつじが丘校区に駅を新設しよう、との大きな声が住民から沸きあがり、地元市議会議員や校区の総代が立ち上がった。平成10年(1998)4月29日、関係する住民代表(国会議員・市議会議員・総代等)



新駅建設予定地

によって「豊橋新駅建設促進期成同盟会(会長:豊橋市長)」が発足し、J R 東海へ新駅建設を働きかけている。

なお、建設資金の一部は土地地区画整理事業組合から寄付されている。

② 病院・金融機関・郵便局

地図(P.25)参照

③ 公共施設

つつじが丘校区市民館 つつじが丘校区市民館は、平成7年(1995)4月市内で48番目の校区市民館として、小学校開校と同時に開館した。小学校体育館の一階部分に位置し、小学校の通用門から入ると、ピロティの奥に堂々と構えた市民館の正面が目飛び込んで来る。小学校の玄関と、間違われることもたびたびである。



つつじが丘校区市民館

市民館の面積は362㎡で、27畳の和室、ほぼ同じ広さの集会室と、その約3分の1の広さの談話室、研修室、実習室の計5室がある。これらの部屋は、年末年始を除いて午前9時から午後9時まで使用可能で、利用者は年々増加の傾向にある。各団体の会合はもとより、校区民が気軽に利用できることから、集会室ではダンス、体操、卓球が、和室では茶道、日本舞踊が、研修室では生花、手芸、大正琴、書道などが盛んに行われている。

談話室は、図書館としての機能も持ち、乳幼児から大人向けの本約2,000冊を収蔵し、誰にでも貸し出し自由である。これらの本は、

生活環境

生活に密着した
各種施設



①古島クリニック



②小石マタニティクリニック



③鈴木内科



④まつやま歯科



⑤柿原クリニック



⑥豊川信用金庫



⑦つつじが丘クリニック



⑧岡崎信用金庫



⑨さかまき歯科



⑩つつじが丘メンズクリニック



⑪ひまわり眼科



⑫岡村クリニック



⑬藤川接骨院



⑭佐藤郵便局



⑮蒲郡信用金庫



⑯神藤歯科



⑰鈴木ひろし整形外科



⑱浅井内科



⑲商工信用組合

市の配本センターより配備されたもので、一か月に一回100冊程度図書交換され、リクエストにも応じている。

また市民館は、地震や台風などの災害時の避難場所という大きな役割も担っている。災害発生時には市職員2人が避難所要員として

配置されるが、市民館従事者も防災訓練や無線機使用の研修に参加するなど緊急時の対応に備えている。

平成15年度からは、東海・東南海地震に対応するため、これまで備えていたシート、毛布、非常食、水などに加え、簡易トイレも配備されている。

近年、核家族化、少子化が進み、地域での教育力の低下が指摘されている。そこで、平成15年度より、地域のコミュニティ活動の中心施設である市民館において「地域いきいき子育て事業」を行っている。この事業は、学校、家庭で得られない体験を通して、多世代の交流を図り、地域共同体意識の向上を目的としたもので、地域のボランティア講師が、夏の川あそび、グラウンドゴルフ大会、クリスマス会、親子で参加の絵手紙教室など行い好評を博している。

つつじが丘3町集会所 新校区発足時に、校区内で町単独の集会所を持っていたのは、集合住宅の二町を除いて、土地区画整理事業外の東三ノ輪町だけであった。また、既存の集会所施設として、佐藤五丁目の八幡集会所があったに過ぎない。つつじが丘3町の会合は、ほとんど校区市民館を利用していたが、老人会の例会のたびに「市民館は遠くてしんどい」の声が出ていた。

何とかならないかという多くの要望を受けて、つつじが丘3町の総代が話し合い平成7

年（1995）4月、集会所建設委員会を結成し、建設に向けて動き出したが、用地の確保、資金の捻出、建設地の位置など問題が山積した。しかし、関係機関との交渉、先進地の視察、各町の意見集約など度重なる試行錯誤の末、住民の賛同を得、平成8年10月、つつじが丘二丁目に3町集会所が完成した。

現在は、老人会を始め、3町の各種団体がほとんど毎日利用している。

東三ノ輪町集会所 集会所は、児童公園の敷地内に建てられている。ここには神域もあり、秋葉神社、本興神社、恵比寿大黒さまの3社が祀られ、秋の例祭日には、終日賑わいを見せる。また、公園の東側には、豊橋の巨木・名木百選の一つ『ソメイヨシノ』の大木が四方八方に枝をはり、春には見事な花を咲かせ、満開の桜の下で花見の宴も開かれる。こうした素晴らしい環境に恵まれた集会所は住民にとってかけがえの無い宝物と言えよう。

現在の建物は、平成17年（2005）9月に新築落成したものである。戦後間もない昭和24年（1949）に土地を取得、旧軍施設の払い下げを受けて建てられた旧集会所は、老朽化し、耐震的に不適なため、建て替えが必要となった。平成14年（2002）、新集会所建設委員会が設立され、建設に向けて動き出した。しかしながら、資金面など多くの問題を抱え、とりわけ登記上の個人所有者が多く、遠方各地に散在し、名義関係も複雑であったため新規



つつじが丘3町集会所



東三ノ輪集会所

登録までに相当の労力と時間を費やした。

こうした苦勞の甲斐あって、新集会所が誕生した日、相集った住民は喜びに沸いた。集会所を利用するたびに「いい集会所が出来てよかったな」の声が出る。

八幡集会所 この集会所は、昭和40年代に、佐藤八幡社の敷地内に建てられた。昭和51年(1976)から平成9年(1997)まで、建物の一部が福岡東部土地区画整理組合の事務所として使用され、つつじが丘校区の誕生に寄与した貴重な建物でもある。

校区市民館が出来てからも、この集会所は、施設も広く整っていて、お宮の行事は言うに及ばず、各町や各種団体にとってかけがえのない施設として盛んに利用されている。施設の管理は、氏子七町の氏子総代が、利用者を使いやすいようにと、きめ細かい気配りをしてくれている。



八幡集会所

つつじが丘地域福祉センター つつじが丘地域福祉センターは、豊橋市と財団法人車両競技公益資金記念財団からの補助金により、平成4年(1992)に設立された。当初、名称は東部地域福祉センターであったが、平成15年(2003)に現在のつつじが丘地域福祉センターに改名、より親しみやすい場所となった。

主に、地域のお年寄りや障害者を対象にした施設で、入浴、給食などの福祉サービスのほかに、各種相談業務、ボランティアの養成および情報の提供など総合的に行っている。

つつじが丘小学校、佐藤八幡社、佐藤公園に囲まれた快適な場所にあり、敷地面積は、4,427㎡で、広場では屋外スポーツを楽しむことができる。ペタンク、ゲートボール、グラウンドゴルフ、シャッフルボードなどが盛んに行われ、お年寄りの元気な声が連日のように響いている。

建物は、延べ面積約600㎡の二階建てで、一階には浴室、機能回復訓練室、集会室があり、校区の選挙投票所としても利用されている。二階には、料理実習室や図書室も備え、お年寄りが趣味や研修に、生きがいを見つけられる場所となっている。



つつじが丘地域福祉センター

つつじが丘交番 土地区画整理事業の完了に伴い、校区内の市街化が急速に進み、非行や犯罪の多発が心配された。ところが、交番は遠く組織も従来のもままで、急を要する場合、連絡・報告・処理などに支障をきたすことが多くなった。こうした問題を心配した住民から「安心安全のためにつつじが丘に交番を」との声が上がった。これを受けて校区の市議会議員や総代会が関係諸機関に強力に働きかけた。その実現は困難を極めたが、校区挙げての熱意が実り平成13年(2001)3月29日、ついにその実現を見た。

今では、住民から「おらが交番」として親しまれ、6人で2人ずつ3交代勤務のお巡りさんも、校区の安心安全を守るため、パトロールや諸活動により一層力が入っている。校



つつじが丘交番

区住民もこれに応じて、全町が夜間パトロール隊を、また、校区青色回転灯防犯パトロール隊を結成し、安心安全の町づくりのため活発に活動している。

更生保護施設「智光寮」(更) 東三更生保護会
 犯罪や非行を犯した人の中には頼るべき家庭や縁故者がおらず、社会復帰の意欲が強くても、それが難しい環境におかれている人が多い。更生保護会とは、このような人たちに宿泊場所や食事を提供し、さまざまなアドバイスをするなど必要な保護を行い、一日も早く社会復帰が果たせるよう手助けをする施設である。

豊橋の更生保護施設として、終戦前には市中心部の三浦町(当時)に「自啓会」があったが戦災で焼失、飯村町には「東三少年院」があったが災害で焼失、以来当地方にはこの種の施設は皆無となり、更生保護に支障をきたすようになった。時の豊橋市長始め東三河各市町村長など関係機関の発議により、昭和28年(1953)12月、市中心部の吉屋町(当時)



智光寮

龍拈寺内に設立された。その後、さらに関係者の涙ぐましい苦心と努力によって、佐藤町字池下に国有地の払い下げを受け、東三更生保護会「智光寮」が建設された。ところが、昭和51年(1976)に土地区画整理事業施行地区内に該当したため、再度移転を迫られたが、県や東三河各市町村の全面的な支援協力を得ることができ、新館建設の運びとなった。

昭和56年(1981)3月鉄筋コンクリート造り2階建の新館が落成し直ちに移転した。20名程が共同生活を営み、協力雇用主やハローワークによる仕事の斡旋によって就職し、自立資金を得て社会復帰を果たしている。

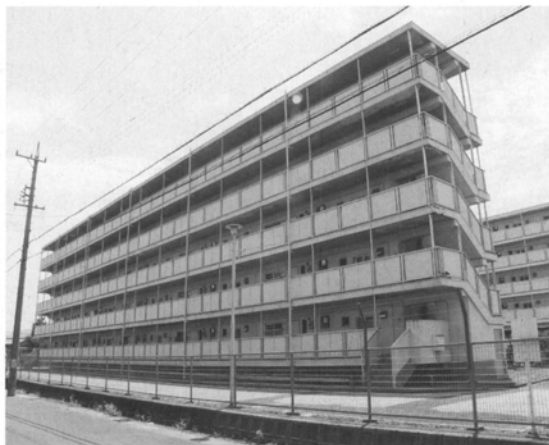
市営オノ神住宅 昭和58年(1983)から7年かけて建てられた「市営オノ神住宅」は、豊橋市で最初に誕生した市営高層住宅である。11階の高さは30mにも達する。柳生川沿いの都市計画公園に隣接し、緑と水に囲まれ、その環境は素晴らしい。

住棟数は4棟、総戸数348戸を数え、付属の共用施設として、駐車スペース、自転車置場、児童遊園、集会室、エレベーターが完備し、入居希望が非常に多く、順番待ちの状況である。

地名「サイノカミ」=オノ神(塞ノ神・幸ノ神とも表記)とは、人間に襲いかかる「悪魔や災難」に立ち塞がり守る神で、村落の入り口に祀られた。このことから、この地にオノ神が祀られていたことがわかる。



市営オノ神住宅



サン・コーポラス佐藤

サン・コーポラス佐藤（雇用促進佐藤住宅）昭和44年（1969）に雇用促進住宅として建てられた。住棟数は五階建て2棟、建設当初の戸数は100戸であったが、平成4年（1992）に2戸を1戸に改造したため、現在は50戸で、常に満室の状態である。住宅に隣接して幸公園があり、住環境に恵まれている。

3 校区の活動

新校区発足当時は、組織も団体も活動内容もすべてが新しく試行錯誤の連続であったが、先輩方の並々ならぬ努力によって軌道に乗ってきた。最近では、文化・社会・体育・奉仕など様々な活動を通して、住民同士の親睦や連帯感も高まり、一人ひとりが新しい校区、これからの校区づくりに意欲的に取り組んでいる。

次に、その活動の主なものを挙げてみよう。

(1) 校区の要・総代会

校区10周年創立記念行事 平成16年（2004）11月3日、創立10周年を記念して、例年の文化祭と兼ねて式典や各種行事を盛大に行った。記念講演の講師に、アテネオリンピック柔道女子63キロ級で優勝した桜丘高校出身の谷本歩実選手を招いた。金メダルを胸に下げた谷



校区10周年記念式典

本選手が姿を現すと、小中学生を中心とした満員の聴衆から大歓声が上がった。特に子どもたちは、体験談に感銘を受け、質疑応答では笑いと感動をもらった。続いて、マジックショーや芸能発表会が賑やかに行われた。市民館ピロティでは各団体の趣向を凝らした模擬店に人だかりができ、最後は豊丘高校の勇壮な太鼓演奏で締めくくった。

なお、直前に発生した中越地震に対して会場に募金箱を置き義援金を募り、後日10周年にちなんで10万円を新聞社を通じて被災地に贈った。

また、総代会では、記念行事の一環として、多発する子どもの被害を防ぐ一助にと、新学学期の始まる4月に、つつじが丘小学校児童全員に防犯ベルを贈った。

校区防災訓練 新校区が発足した平成7年（1995）から毎年7月に実施している。校区防災訓練は小学校を会場に、主として避難・救急救護・消火などの訓練を、市消防本部、地元消防分団の指導協力のもとに行っている。毎回600人余の参加があり、住民の防災意識は非常に高く、小学校も学校行事として参加している。巨大地震の発生による警戒宣言の発令を想定し、授業を中断して、子どもたちを速やかに保護者に引き渡す“保護者引き取り行動”や高学年児童の起震車「グラット号」による地震体験などを実施している。



校区防災訓練のようす

こうした校区の防災訓練が評価され、平成16年（2004）には県のドクターヘリが特別に参加した。市内の校区の防災訓練で、ドクターヘリが参加したのは初めてで、長久手町からわずか15分で小学校校庭に着陸、校区総代を「にわか患者」に仕立ててストレッチャーごとヘリコプターに収容し、校庭で離着陸のデモンストレーションを行った。

校区納涼祭 毎年8月初旬に開催。各種団体の協力のもと盆踊りをメインに子どもたちの喜ぶ模擬店も開き、校区民こぞって参加し、夏の夜の一時を楽しんでいる。



校区納涼祭

(2) 校区を支える委員・団体の活動

子ども会 小学校新設に伴い発足したつつじが丘校区の子ども会は、子どもの自律心を育てることを目標とし、地域の人々や学校と手をつなぎながら、様々な活動を力いっぱい実施している。

年間行事として、各町の子ども会行事を中心に、フットベースボール大会、綱引き大会



子ども会の活動

を開催している。また、校区体育祭への参加や市子連のリーダー研修会、豊橋まつりパレードに参加するなど活発に活動している。

社会教育委員会

毎年7月に行う研修旅行（ふれあい旅行）には毎回希望者が多く、好評を博している。平成17年度は、中部国際空港セントレアとイタリア村という新人気スポットのため参加者が多く、バス2台が満席の盛況であった。

主催するもう一つの行事が成人式である。新設校のため、平成14年度までは、成人者が各小学校へ分散し、校区の成人式には10数名の参加で来賓の方が多く、式典は市民館の一室で行なわれていた。

つつじが丘小学校第1回卒業生が参加した平成15年度の成人式は、参加者98名を数え、式場も小学校の体育館に移り盛大に行われた。当日は、卒業時の校長を始め恩師の方々を招き、学校の歌を作詞作曲した金藤カズ、富安秀行両氏による生バンドの演奏で『夢かなうその日』を全員で熱唱し、まさに感動の成人式であった。



ふれあい旅行

社会体育委員会 体育委員会は、各町選出の委員と校区体育指導員2名で構成し、校区民の日常の健康作りや体力の増進に関わる活動を行うとともに、その活動を通して校区民の親睦を図ることを目的にしている。

毎年の行事として、体育祭を始め、男子ソフトボール、女子キックベースボール、ソフトバレーボール、インディアカなどの球技大会を行なっている。またブロック大会や市の大会などを通じて他の校区とも親睦を深めている。

体育委員会の最大の行事は校区体育祭で、各町対抗競技も多く、子どもからお年寄りまで家族そろって参加し、力いっぱい競技し、応援にも力が入る1日である。



体育祭

交通安全委員会 校区民の交通事故防止が交通安全委員会の最大の目標であり願いである。春夏秋冬に全市的に行なわれる「交通安全市民運動」期間中は、児童の登校時に総代、PTA、有志の方々とともに信号交差点などに立ち、交通指導を行っている。また、つつじが丘交番の警官とともに近くの交差点で、シートベルト、チャイルドシートの装着状況をチェックしている。

平成10年度には小学校校庭で校区交通安全推進大会を開き、県警音楽隊の演奏を鑑賞した。平成11年度には、藤ノ花高校マーチングバンドを招き、交通安全大パレードを行った。当日は小学校高学年児童、総代会始め各種団



交通安全大パレード

体から約200名が参加、幸公園から大通りを経て小学校まで整然とパレードを行い、住民や道行く人々に交通安全をアピールした。

文化委員会 文化委員会の主催する行事に校区文化祭があり、例年11月3日の文化の日に市民館で開催する。玄関には愛好家の育てた大菊が展示され、会場は終日賑わいを見せる。

各室には日頃市民館を利用し活動している手芸、生花、書道、フラワーアレンジなどのグループ作品のほか、一般の作品を展示している。また、和室では芸能発表会が行われ、大正琴、琴、三味線、舞踊、健康体操などのグループが練習の成果を披露し、一般参加のカラオケのど自慢もあり大いに盛り上がる。

ピロティーでは、各団体やグループの模擬店もあり、子どもたちの楽しみの一つになっている。締めくくりは豪華景品の当たる福引が行われ、当選毎に歓声が上がる。最近では、国内外で活躍している豊丘高校の勇壮な和太鼓演奏の鑑賞も行われる。



文化祭

防犯委員会 『自分たちの町は、自分たちで守ろう』をモットーに、犯罪や非行のない安心安全で明るい町づくりを目指し活動している。

委員による定期的な校区内夜間パトロールや納涼祭などの校区行事の会場警備を始め、夏休みには、青少年健全育成会による「愛の一声運動」に参加し非行防止を呼びかけている。また、委員が各町の夜間防犯パトロール隊、校区防犯パトロール隊に積極的に参加するなどの実践活動をしている。なお、市や警察などの関係機関と連携して、ポスターの貼付やチラシの配布に協力し、非行や犯罪に対する住民の意識の向上を図っている。



防犯委員会

清掃指導委員会 清掃指導委員会は、市の委嘱で校区や各町の美化・530運動の推進役を担い、『私たちの町は私たちの手できれいに』を合言葉に、清潔で明るい校区づくりを目指している。

校区や各町のごみ処理で大きな問題になっているのは、ごみの無分別、収集日の無視、不法投棄など、一部の不心得者のため、ごみステーションの存在価値が薄れてきていることである。これを解決しようと町役員と委員が、ごみステーションに立って、ごみ分別などの指導や協力を呼びかけている。

委員会の活動として、年2回行われる市主催の530運動への参加の呼びかけや、毎月の



清掃指導委員会

当番制による幸公園の清掃を行っている。

更生保護女性会 更生保護女性会は、罪を犯した人や非行に走った青少年の立ち直りを助けるとともに、地域の関係機関や団体と協力して、犯罪や非行のない明るい社会づくりを目指している。会員数は、平成17年度は9名と少ないが、活動内容は、次のように多岐にわたり、やりがいを励みに頑張っている。

校区内の更生保護施設「智光寮」の清掃奉仕や運動会への参加、豊橋刑務所の盆踊り参加や刑務所見学、小中学校の健全育成会や児童会・生徒会行事への参加、赤い羽根・歳末助け合い街頭募金活動、チャリティーバザー奉仕、社会福祉大会への参加、校区行事への参加などがある。また、平成16年度から、若い母親を対象にした「つつじが丘子育て広場」を年3回校区市民館で行い喜ばれている。



つつじが丘子育て広場



民生委員児童委員

民生委員・児童委員 少子高齢化時代になった今、社会福祉のあり方が様々な面で問われている。民生・児童委員にはこうした社会情勢に即応した福祉活動が求められ、その内容は多岐にわたるが、主なものを挙げてみる。

老人関係では、福祉電話と家庭訪問による一人暮らし老人の安否確認、電車・バス福祉回数乗車券および敬老バッジ・記念品の配付、敬老の日祝金品の配付などがある。青少年関係では、児童・青少年からの相談業務、健全育成関係行事への積極的参加などがある。福祉関係行事では、赤い羽根共同募金、歳末助け合い街頭募金への参加、援護対象世帯の調査と慰問金品の配付、高齢・母子・父子家庭などからの相談、福祉関係行事への参加などがある。

消防団 消防団は、火災や風水害、地震などの自然災害から地域住民の生命財産を守り、被害を軽減し、安心安全な街づくりに貢献す



消防団

ることが任務である。

日常の活動内容として、火災予防活動や警備警戒活動、教育訓練活動、器具の点検整備、校区行事への参加などがある。

毎年行われる校区防災訓練では、市消防本部と連携して参加し、救急救出、消火、避難などの指導・実演を行い、その熟練した機敏な行動は、訓練参加者の賞賛を浴びている。

平成11年（1999）9月24日、豊橋を襲った戦後最大級の竜巻は、つつじが丘校区にも大きな被害をもたらした。消防団は、いち早く状況を把握し、直ちに出動態勢を整えて被災地に向かった。道路をふさぐ障害物の除去や信号機の被害でマヒ状態の道路での交通整理、また、被災家庭への救援物資の配付などを敏速かつ的確に行い、被災者はもちろん校区民に感銘を与え、感謝された。

女性防火クラブ つつじが丘校区女性防火クラブは、平成16年度に役員1名を推薦という形で「豊橋市女性防火クラブ連絡協議会」に参加したが、正式な発足には至らなかった。総代会は、校区の防火防災組織の重要性を考え、校区全体に参加を呼びかけた。その結果、趣旨に賛同し参加を希望する女性が増加した。

平成18年度、クラブ員15名で正式に発足し、市や校区の火災予防（主に住宅防火）活動を中心に、防災訓練、春・秋の火災予防運動などの消防機関が実施する行事への参加協力、また、校区内の女性を対象とした防火教室や



女性防火クラブの炊き出し訓練

救命講習会の開催などを実施している。

老人クラブ 各町老人クラブは月1回の定例会を開き、地区の公園などの清掃やレクリエーションなどを行っている。校区老人クラブとしては市老連主催のチャリティーバザーなどに参加するとともに、校区で行われる防災訓練、納涼祭、体育祭、文化祭などに積極的に参加し、老人パワーを発揮している。また、最近全国的に多発している子どもの被害を防ぐために登下校時に要所に立つなど子どもの安全にも協力している。

しかしながら問題点もある。少子高齢化社会に入って、老人クラブの果たす役割はますます重要性を増しているが、リーダーや世話係のなり手がなく、解散したり、解散寸前に追い込まれている老人クラブが少なくない。



老人クラブ

PTA PTAは、学校と家庭と地域社会を結び、校区の発展向上に欠くことのできない役割を担っている。特に、子どもに対する事件事故が多発している最近では、ますますその重要性を増している。

PTAは、7月に行われる校区防災訓練の児童の「保護者引き取り行動」、マラソン大会後の「豚汁」のサービスなど数多くの学校行事にかかわるとともに、自主的活動として、年3回の資源回収、毎年7月の「つつじバザー」による活動資金の確保、多発する子どもの被害を未然に防ぐための登下校時の付き添いや見回りなどを行っている。夏休みに実施



PTAバザー

される校区健全育成会主催の「愛の一声運動」では、女性役員が広報放送を受け持っている。

(3) 校区を愛する自主活動

柳生川愛護会 校区内には柳生川（上流は殿田川）、幸公園内の長三池を源とする長三川、山中川の三つの川が流れている。ご多分にもれず川の汚れはひどく、自転車、タイヤ、傘、発泡スチロール、ビニール袋など様々なごみ・投棄物が目についた。

校区や各町の530活動は活発に行っていたが、川の掃除にまでは手が届かなかった。これに気づいた住民から、「川の掃除をしよう」と声があがり、川に接した町が立ち上がり、隣の向山校区にも呼びかけて賛同を得た。

平成9年（1997）9月9日「柳生川愛護会」が、佐藤一丁目から三丁目、つつじが丘一丁目、佐藤町オノ神、東三ノ輪町、東向山三区の7町を会員に発足した。当日は、各町



柳生川愛護会

から約1,000人が集まり、会場の佐藤一丁目の平子公園が参加者であふれ、愛護活動への意識の高さが伺えた。

毎年2回、市の530運動に合わせて、各町の530活動後に愛護活動を行っている。毎回約700人が参加、「蛍の飛び交う柳生川」を合言葉に、ゴミ袋を手に美化作業に精を出している。特別に向山校区の消防団が参加して、川の中の自転車等の粗大ごみの収集を担当し感謝されている。なお、柳生川愛護会は市の「530運動環境協議会」に加入している。

幸公園を愛する会 幸公園は一周約2kmの長三池を中心に、兩岸をつなぐ幸福橋、池の中の大水車、池の周りには、芝生広場、散策路、藤棚、遊具広場、遊水施設などバラエティーに富み、広々とした景観は素晴らしい。ここは、近隣の人々はもちろん市内各地から訪れる人も多く、四季を通じて憩いの場として親しまれている。

しかし、残念なことに心無い人のごみのポイ捨てが後を絶たず、ボランティアの善意のごみ拾いも限界に達した。さらにここにもホームレスが居つき、訪れる人々に不快感を与えるようになった。こうした実情から「校区として放っておけない」という声を受けて、総代会や市議会議員の発案で、「校区のみんなで幸公園をきれいにしよう」と個人や団体のボランティアの募集をした。

そして平成13年（2001）9月、「幸公園を



幸公園を愛する会

愛する会」が発足した。当日は、約100人が参加、ゴミ袋を手に手に公園一帯をくまなく歩き、約1時間でごみ集積場は山になった。団体参加の消防団は主にホームレスが放置した自転車、布団、衣類などの大きなごみの収集に当たった。こうした活動は、公園内の美化とともにホームレスの居づらい環境づくりにも役立っている。

なお、毎月第三日曜日を会の定例活動日として現在も継続し、幸公園を愛し続けている。**つつじが丘防犯パトロール隊** 多発する犯罪傾向は、ここ、つつじが丘校区も例外ではない。全国・県の犯罪発生率の中でも上位を占める豊橋市であるが、さらに、これを校区別の発生率で見ると、本校区は常に上位を占め、いかに犯罪が多発しているかを知ることができる。これを憂慮する人はいても実際に防犯活動に動き出す人はいなかった。

こんな折、つつじが丘二丁目の組長会で、「二丁目は車上狙いが多い」との声が出た。参加者から早速「夜間パトロールをしたら」と発案があり、総代を発起人に町全体に呼びかけ、ボランティアを募集した。平成15年（2003）10月、「二丁目夜間パトロール隊」が発足、週2～3回の町内パトロールを始めた。2か月もすると車上狙いの被害がめっきり減り、効果が認められた。このことは、新聞に取り上げられ、校区や他地区の防犯活動へのさきがけとなった。平成16年度には、校区内



防犯パトロール隊

全町も「夜間パトロール隊」を結成した。一時的な活動でなく、息の長い活動をするための工夫を凝らし、今夜もパトロールが行われている。

夜間パトロールが軌道に乗った矢先、平成17年（2005）1月、校区内で白昼、子どもの連れ去り未遂事件が発生した。こうした事態を心配した住民から、もっと機動性に富んだ防犯活動をしようにと提案があった。折しも平成16年（2004）12月1日、法改正に伴い民間の防犯活動に青色回転灯装着車が許可されることとなった。本校区も各町総代、活動に熱心な有志を中心に市・警察などの関係機関と緊密な協議を重ね、実現の運びとなった。隊員資格取得のための講習を受講すること、さらに、警察および陸運局の許可などの条件があったが、全てクリアし、晴れて隊員が誕生した。

平成17年（2005）4月15日、「つつじが丘防犯パトロール隊」が発足、隊員30名、青色回転灯装着車14台で活動を開始した。青色回転灯パトロールは夜間は点灯して当番制で巡回するなど、昼夜を問わず随時パトロールしている。隊員は、防犯パトロール中を示すステッカーを自動車に貼付して、児童の下校時を中心に随時巡回して安全を確保している。

こうした活動により、平成16・17年度に警察より表彰され、さらに平成17年には県警より「防犯まちづくり重点地区」に指定、防犯講習の開催、センサーライトの貸与など県警と協力して活発な防犯活動を行っている。

なお、平成18年9月11日、東部・中部中学校区全体をパトロールできるようにするため、つつじが丘・飯村・岩西・向山・新川校区合同で新たに「豊橋パトロール隊」を発足し、安心安全な町づくりを目指して活動している。スポーツを愛し、親しむ人たち 校区には、子どもから高齢者までスポーツに親しみ、ス

ポーツを愛する人が多い。健康増進であれ、趣味であれ、同好の志が相集い、共に汗し、声を出し、技術を高め、友情を培い、ひいては助け合いにまで発展する、ここにスポーツの醍醐味がある。「学校開放」によって、体育館、運動場を使用するスポーツ団体は非常に多く、事務局は使用日時などの調整に苦労している。その団体名は次のとおりである。
 <校区内>エースつつじが丘バレーボール、つつじが丘インディアカクラブ、つつじが丘ママさんバレーNEO、つつじが丘ソフトバレークラブ、ベルクラブ（ソフトバレー）、エアロビクラブ、つつじが丘男子バレー、つつじ一丁目ソフトボールクラブ、つつじが丘ソフトボール、校区ソフトボール女子、豊橋ユニオンズ（野球・子ども）、つつじフォックス（野球・子ども）、ワイルドダックス（サッカー・子ども）、豊橋SS（サッカー・子ども）

<校区外>シーガルス（バスケット）、豊橋ミニ（バスケット）、岩西バッファローズ（野球・子ども）、ツェールマンFC（サッカー）、フォルツァIT（サッカー）、リベラル豊橋FC（サッカー）

また、高齢者を中心にゲートボールはつつじが丘地域福祉センターのゲートボール場で、ペタンクは学校隣のペタンク広場で、和気あいあいの中でゲームを楽しんでいる。市老連や地域の大会に積極的に参加して好成績を収め、つつじが丘強しの評判を取っている。



ペタンク

第3章 教育と文化

1 学校教育

(1) 寺子屋 - 教育の先覚者 岡田兵吉

明治5年(1872)の学制が頒布される前の教育には、大別すると藩校と寺子屋があった。

藩校は、武士の子弟を教育するために諸藩が領内に設けた学校であり、寺子屋は、庶民の子弟のために、読み・書き・そろばんを学ばせた所である。寺子屋は、古くは室町時代末期に始まるが、江戸末期から明治初頭にかけ

岩田→岩西→つつじが丘小学校

明治6年10月 第2大学区第10中学区6番至誠館(三ノ輪村士族屋敷を校舎として)開校
 明治8年3月 第6番小学至誠館を第6番小学三ノ輪学校と改称。東田村の内101戸、福岡村の内31戸、高師村の内21戸、三ノ輪村31戸を通学区とする
 明治9年4月 同上三ノ輪学校を第20番小学三ノ輪学校と改称
 明治12年6月 飯村清晨寺内に第21番小学飯村学校開校
 明治13年5月 同飯村学校を渥美郡第16番小学飯村学校と称する
 明治17年5月 渥美郡第15番小学三ノ輪学校となる
 明治17年5月 渥美郡第16番小学飯村学校となる
 明治20年4月 同上二校の他に仁連木、岩田と岩崎学校を合併、渥美郡尋常小学岩田学校となる
 明治22年10月 6か村が合併して豊岡村となり、渥美郡豊岡村立豊岡尋常小学校と改称
 明治26年 豊岡村立第一尋常小学校となる
 明治29年 豊岡村立豊岡尋常高等小学校となる
 明治29年8月 豊橋市に合併
 明治40年 豊橋市立岩田尋常高等小学校となる
 昭和16年4月 豊橋市立岩田国民学校と改称
 昭和25年9月 豊橋市立岩田小学校岩西分校となる
 昭和26年4月 豊橋市立岩西小学校として開校
 平成7年4月 豊橋市立岩西小学校から分離、つつじが丘小学校が新設開校

福岡→岩西→つつじが丘小学校

明治6年3月 第10中学区第10番小学高足学校出張所橋良学校として開校
 明治9年4月 第10中学区第29・30番小学福岡学校として改称(橋良村正光寺)
 明治11年 橋良村東郷に新築移転
 明治13年5月 渥美郡第9番小学福岡学校と改称
 明治17年5月 渥美郡第10学区小学福岡学校と改称
 明治20年4月 渥美郡尋常小学福岡学校と改称
 明治21年 福岡村立福岡尋常小学校と改称
 明治25年 渥美郡福岡尋常高等小学校と改称
 昭和6年3月 校舎を現在地に移転
 昭和7年9月 福岡村が豊橋市に合併、豊橋市立福岡尋常小学校と改称
 昭和16年4月 豊橋市立福岡国民学校と改称
 昭和22年4月 豊橋市立福岡小学校と改称
 昭和25年9月 豊橋市立岩田小学校岩西分校が開設
 昭和26年4月 豊橋市立岩西小学校が開校。佐藤町が福岡小学校区から岩西小学校区となる
 昭和27年4月 豊橋市立福岡小学校より栄小学校が分離開校
 平成7年4月 豊橋市立岩西小学校を主体に、向山・栄・松山・飯村・幸の各小学校から分離、つつじが丘小学校が新設開校

て多く開かれ、豊橋地方には約250余りあったといわれている。

現在のつつじが丘校区が属していた福岡校区には5つ、岩西校区には4つの寺子屋があったが、その1つが佐藤村の地に開かれていた。師匠（教える人）は岡田兵吉（文政10年（1827）～明治32年（1899））、筆子（習う子ども）は男の子ばかり10人の寺子屋であった。

一般に師匠の多くは僧侶・神主・町人であったが、農民の兵吉が師匠としてこの地の農民の子に読み書きを教えたことは意義深い。

現在、兵吉に教えを乞うた筆子10人によって兵吉の為に建てられた墓石が、「佐藤霊園（佐藤二丁目）」にあり、静かに世の移ろいを見守っている。



岡田兵吉の墓

(2) 学校の始まり

現在のつつじが丘小学校の新設まで、この校区は幾多の変遷を経てきた。明治5年8月3日の学制の頒布により各地に小学校が開設されたが、旧佐藤町を中心とした地域は福岡小学校区から岩西小学校区に、三ノ輪町字本興寺は岩田小学校区から岩西小学校区になった。このため、つつじが丘小学校の開校までの沿革を語るには、前ページの表のとおり2本建てになる。

(3) つつじが丘小学校の誕生



平成7年（1995）4月、佐藤五丁目（当時佐藤町字東谷）に、市内で52番目の小学校として開校したつつじが丘小学校は、豊橋市の

南東部地域に位置し、JR豊橋駅から約2.7kmの所にある。急速な人口増加と街並みの変貌著しい中で、豊橋福岡東部土地区画整理事業により、隣接する岩西小学校を母体に向山・栄・松山・飯村・幸の6小学校から分離新設された学校である。児童数651人、20学級、職員29人の規模で発足した。

校名は、豊橋市の市花である「つつじ」の名を採用し、校章は、青く澄み渡る大空につつじの花が咲く様子をデザインした。子ども達が、「美しく・明るく・逞しく」育ち、未来に素晴らしい花を咲かせて欲しいという願いが込められている。

校舎は、屋上に大小プールを設けた鉄筋三階建（一部四階）校舎棟と一階に校区市民館を併設した体育館棟からなっている。北校舎は、豊橋市では初めての切り妻風の屋根を取り入れ、木をふんだんに使った図工室、音楽室、図書室などの特別教室がある。また、南校舎には普通教室があり、その横には、可動式の壁で教室の広さが変えられる多目的スペースが設けられている。なお、平成11年

(1999)、児童数の増加に伴い、南校舎西側に、一階を職員駐車場、二階を普通教室とする増築工事を行っている。

敷地南側には校名にあやかり、ヒラドツツジ、サツキツツジ、キリシマツツジなど30種ものツツジが約1,900本植えられ、春には色とりどりの花を咲かせる。

通学区域は、つつじが丘一丁目～三丁目、佐藤一丁目～五丁目（当時佐藤町、山田町、高師町、飯村町の一部）、三ノ輪町字本興寺となっている。

開校式には、児童や職員、校区関係者ら約500人が出席、新しいスタートを祝った。

平成8年（1996）2月、学校の歌「夢かなうその日」の発表会が開かれた。校内行事で子供たちが歌う学校の歌を早く作りたいとPTAを中心に準備を進め、卒業式を前に完成した。作詞は校区内の旧山田町生まれの金藤カズさん、作曲は金藤さんのバンド仲間である湖西市の富安秀行さんである。フォークとニューミュージックを合わせたリズムの歌いやすい曲調で、発表会では、全校児童の喜びの歌声が、学校内外に響き渡った。

最新の施設設備という恵まれた環境の中で、児童も職員も「新しい歴史を築く」という共通の目標に向かって懸命に歩いてきた。学校は、特色のある学校作りに積極的に取り組み、



開校式の様子



「夢かなうその日」の発表会

学校・家庭・地域との連携だけでなく、国際交流にも力を入れている。

特色ある教育活動に努める学校では、「ひと・もの・こと」とかかわる心豊かな体験活動として平成8年度から、三ヶ日青年の家でのカッター訓練を6年生の学年行事として位

「夢かなうその日」

作詞 金藤カズ
作曲 金藤カズ、富安秀行

- 1 太陽はるか こだまする 歌声
つつじ咲く丘に 芽ばえた 息吹
いつか夢かなうその日 友とわかちあえば
涙が 汗が 笑顔にかわる
咲き誇れ 光の中 あざやかに
- 2 若葉かがやき 調べうつ 時計台
つつじ咲く丘に のびゆく いのち
かなた虹 ふれる心 友と語りあえば
自由が 友情が きずなにかわる
咲き誇れ 風の中 さわやかに
- 3 なわとび かけっこ ボールけり
集まれ 元気な つつじっ子
手をつなぐ 地球は ふるさと
遊ぼうよ 学ぼうよ 夢のてっぺんめざして
明日が 未来が 君のその手に
いつまでも 咲き誇れ つつじが丘
今ここに 咲き誇れ つつじが丘

置付けている。カッターは一部の児童がオールを力まかせに漕いでも、うまく進まない。一人ひとりの力が弱くても、全員のオールが揃っていれば、カッターは海面を滑るように進む。この体験を通して子どもたちは、協調の難しさと協力や友情の大切に気づくであろう。また、浜名湖という環境の中で行うことにより、気象や海象の変化を肌で感じ、機敏な動作と判断力を養う機会ともなっている。

開校当時、3中学校に分かれて進学する子どもたちに、思い出に残る体験活動をさせようと始めたカッター訓練は、その後も6年生には欠かせない体験活動の場として引き継がれている。

部活動も活発で、体育部では、各種大会で数々の優勝を獲得するなど好成績を収め、文化部においても各種作品展や発表に積極的に参加し、その力を十分に発揮している。とりわけTKB（吹奏楽）は、東海大会へも出場するなど好成績を収めている。

児童会は、『東部中学校のわ』に参加、あいさつを奨励する活動「あいさつサミット」を積極的に行っている。



TKB（つつじ・キッズ・バンド）

（4）東部中学校と中部中学校

平成7年4月、つつじが丘小学校が開校したが、隣接する6小学校から分離新設されたため、卒業後に進学する中学校が東部中学

校・中部中学校・南部中学校の3校に分かれる状況になった。土地区画整理事業を進める中で、小学校区内に中学校を新設する案もあったが、事情により実現できなかった。

卒業生は、進学喜びも半ば、親友との別れに涙し、地域住民は「子どもたち全員が一緒に通える中学校の新設が前提だったのではないかと」、中学校の新設を含む改善を求めた。市ではこの要望に応えるため、長三池東側を建設候補地にあげたが、これも事情が許さず実現不能となり、平成9年、中学校新設問題は凍結された。

校区総代会は、中学校新設を強く要望するが、暫定措置として、次のような通学区域割りを提案し、市も同意して現在に至っている。

東部中学校区／佐藤二丁目～五丁目

三ノ輪町字本興寺

中部中学校区／佐藤一丁目

つつじが丘一丁目～三丁目

なお、両校とも通学距離2km以上の生徒については自転車通学を認めている。

中学校別進学者数

年度	東部中	中部中	南部中	その他
H 7	56	24	10	4
H 8	57	29	18	4
H 9	60	28	12	16
H 10	60	28	1	6
H 11	50	55		7
H 12	54	69		9
H 13	62	63		8
H 14	62	63		5
H 15	61	69		9
H 16	64	71		5
H 17	52	69		4



東部中学校（飯村北四丁目）

昭和57年4月2日、市内で18番目の中学校として開校した。豊岡中学校区内各地の区画整理事業によって急速に市街化が進み、豊岡中学校の生徒数の増加が著しく、収容能力が限界に達したため、分離独立した中学校である。

開校当初は、岩西小学校からの生徒789人、20学級の規模で発足したが、生徒数の増加が続いた。昭和58年（1983）、校区内に飯村小学校が新設され、通学校が2校になり、昭和60年（1985）には、生徒数1,049人、25学級に達した。さらに、平成7年（1995）につつじが丘小学校が新設され、通学校が3校になった。平成18年度は、生徒数791人、22学級（内特殊1）である。また、近年になって校区内在住の外国人の子弟が急速に増加したため、平成8年に「国際学級」（普通学級の内数）が設置され、現在、生徒数40人・担任2人で運営している。

学校は、校区に根付いた学校経営を目指して校区内各方面との情報交換をきめ細かく行うとともに、校区民に積極的に生徒と関わってもらい『東部コミュニティ大学』を開校し、開かれた学校づくりに努めている。平成17年（2005）10月には「ひらかれた学校づくりの実践をとおして」をテーマに研究発表会を行った。



あいさつサミット週間

また、体育・文化の部活動だけでなく、生徒会も活発に活動している。

「東部中学校のわ」は、小学校3校との日常的な連携に努める活動で、職員の協力体勢を強化し、9か年かけて児童生徒を健やかに成長させることを目的としている。

活動の一つに、平成13年（2001）8月に発足した「あいさつサミット」がある。あいさつを奨励して1日を気持ち良く過ごし、明るい教室や地域にしようと、4校の教諭でつくる「東部中学校のわ推進委員会」が企画した。

4校の生徒会・児童会の代表が参加、学校毎にあいさつの実態報告およびあいさつを奨励するためのキャラクターとボランティアを



キャラクターシール「グッドモアイ」

募集することを決めた。その後、キャラクターシール『グッドモアイ』の作成・配付や「あいさつサミット週間」など活発な活動が進められ、着々と成果を上げている。



中部中学校（舟原町）

昭和22年（1947）に施行された新学制（6・3制）により、4月18日豊橋市立中部第一中学校として開校した。校区はほぼ現在と変わらないが、生徒数は戦後のベビーブーム時をピークに大きく変動している。ここしばらくは、700人前後の推移を繰り返しているが、ピーク時の昭和37年度には、2,500人余の生徒が在籍し、豊橋一のマンモス校であった。

その間、校区内の街区整備などにより小学校の統廃合が行われた。昭和34年（1959）には、新川小学校の児童数の増加に伴い向山小学校が分離新設され、平成7年4月には、つつじが丘小学校が新設されたため、通学校が松山・新川・向山・つつじが丘の4小学校になった。伝統的に運動部の活動が盛んで、これまで、陸上部やバレーボール部などが県大会優勝、全国大会出場など、輝かしい成績を残している。最近では、平成13年度の野球部全国大会ベスト8進出を始め、弓道部・ソフトボール部などが、県レベルで活躍している。

生徒会活動も盛んで、「自由と責任」を合

言葉に、生徒の主体的・積極的な活動が伝統となっている。中でも全校生徒が一丸となって作り上げる学校祭、学級全員が自主的に練習し発表し合う合唱コンクールは、保護者からも高い評価を得ている。

また、地域に開かれた学校を目指して、学校の概要、教育目標、教育課程、教育活動の状況などについて、PTAの会合や、学校評議員会、中部中モニター会議、学校新聞などで積極的に知らせ、意見を取り入れるようにしている。

特色ある行事の一つとして、豊川堤防を豊川市一宮町まで往復するTBW（豊川ビッグウォーク）が挙げられる。これは、昭和55年（1980）に生徒の持久的な体力をつける目的で始められ、現在まで続いている長距離歩行である。健康ブームでもあるせいか、現在では生徒と一緒に参加する地域の方々も多く見られるようになった。



豊川ビッグウォーク

(5) 幼児教育

平成17年度のつつじが丘小学校入学児童の出身園をみると、保育園9園、幼稚園19園と非常に多い。県内外の施設名もあるが、校区周辺の施設からの園児が大半を占めている。出身園の多さの理由として、校区内に保育

園・幼稚園といった幼児教育施設がないため、校区周辺の施設に通園せざるを得ないからである。

登退園時には、十指に余る大小の送迎バスが校区内を巡回し、乳幼児の送迎をしている。



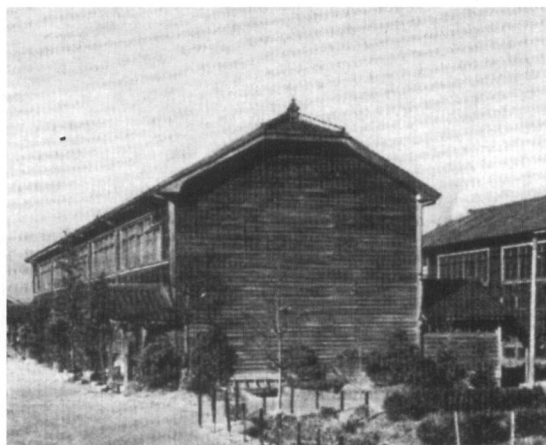
送迎バス

(6) 松操高等女学校

校区内に、高等教育を施す学校があったことは、一部の人にしか知られていない。今ではその跡を留めていないが、その沿革を紹介する。

明治38年（1905）、豊橋南部裁縫女学校が創られた。創立者は、松山の製飴業者中野彦助であった。その娘きぬが、上京して日本女学校に学んで帰ったので、これに教授させたことに始まる。豊橋が市制になった直後の明治40年（1907）7月に正式に県の設立の許可を受け、校名を「私立豊橋松操裁縫女学校」とした。昭和15年（1940）3月22日に文部省の認可を得て、山田町（現つつじが丘三丁目）に豊橋松操高等女学校を設立し、高等女学校と裁縫女学校（松山町）の二本立てとなる。

生徒は戦時中には豊川海軍工廠へ学徒動員され、兵器の製造に従事していたが、昭和20



松操女学校（昭和18年頃）

年（1945）8月7日の空襲で先生と生徒46人の犠牲者を出した。

昭和23年（1948）4月の学制改革により、松操女子高等女学校となり、高校は本科3か年、別科1か年のほか新制中学も併設した。一時は高女900人、裁女300人を数え隆々たる校勢を誇ったが、昭和24年頃から学制改革によるしわ寄せが入学者減少という結果をもたらした。職員生徒父兄の懸命の努力も空しく、ついに昭和26年（1951）3月15日をもって自然廃校となった。

現在は、財団法人松操学園「松操裁縫女学校」（鍵田町）の名のもと、和洋裁の専門校として継続している。



当時の松操女学校の様子

2 社会教育

(1) 青少年の健全育成

校区内の青少年の健全な育成と事故の防止を図るため、小中学校区の健全育成会を中心に、関係諸機関が連携し合い、地道にしかも実のある活動を行っている。

主な活動は、校区民の健全育成に関する意識の向上を図るため、総会や講演会を開催したり、自己を見つめるとともに周囲に対する関心を高めるため、児童生徒からポスターや標語を募集している。さらには、健全育成会だよりの発行や校区内のパトロールを行うなど学校、家庭、地域と常に連携しながら様々な活動を行っている。

愛の一声パトロール（つつじが丘小学校）

全国規模の「社会を明るくする運動」に合わせて夏休み中に実施する「愛の一声パトロール」は、総代会・PTA・各種団体約60人が自動車に分乗し、2班に分かれ「社明のぼり」車、拡声器搭載車を先導に、広報放送をしながら校区内を巡回し、公園、大規模店舗などでは停車して補導活動を行うものである。



愛の一声パトロール

合同補導（東部中学校区）愛護センター主催でほぼ毎月1回開催される。各校の生徒指導主任・PTA副会長・保護司・校区育成指導員・主任児童委員・更生保護女性会長が参加し、各学校の近況報告並びに参加者の意見

や感想等の話し合いを行う。その後、校区別に大規模店舗やゲームセンターなどで補導活動を行うもので、中部中学校区も同様である。**モニター会議（中部中学校区）** 年6回開催され、校長・教頭・各校の生徒指導主任・中部中教護部員・校区育成指導員・校区主任児童委員が参加し、各学校の近況報告や意見交換、質疑応答などを行う。なお、会議終了後、主任児童委員及び校区指導員による校区パトロールも行う。

(2) つつじが丘児童クラブ

つつじが丘児童クラブは、下校後の留守家庭の児童を受け入れる市の施設で、平成7年（1995）の小学校開校と同時につつじが丘校区市民館内に間借りして発足した。開設時間は月～金曜日の授業終了後～午後6時で、帰宅の時は保護者が迎えに来ることを条件にしている。また、長期休暇の時は午前8時から利用でき、学校の行事に合わせた柔軟な対応をとっている。3年生までの児童が対象で、母子家庭の子どもを優先的に受け入れている。

当初、14人で発足したつつじが丘児童クラブであったが、人口の増加に伴い毎年在籍者が増え、市民館では手狭になってきた。そして平成12年（2000）に学校の敷地内のごみ焼却炉が取り壊しとなり、その跡地に専用の施設を設立して現在に至っている。



児童クラブ

現在は、50人以上の児童が在籍しているが、学校の敷地内にあることから、安全の面において恵まれた施設である。

3 信仰と文化財

(1) 信仰

佐藤八幡社 祭神は応神天皇すなわち^{こんだわきの}誉田別命^{みこと}である。1600年代、野依村の左藤氏によって開発された新田を高足村字左藤村（佐藤町の由来）と言い、寛文7年（1667）左藤氏が自分の氏神である八幡社を左藤村に造ったことから始まる。

明治元年、三河地方を襲った豪雨により、長三池の堤防が決壊して大洪水となり、佐藤町字北島にあった神社は流出してしまった。その際、現在の地に移築されたが、土地区画整理事業実施に伴い、三度目の建て替えが行われ、平成4年（1992）10月10日、盛大に御遷宮が行われた。

当日は御遷宮を祝い、華々しい稚児行列が粛々と進み、有志による木遣り連が町内を練り歩き、勇ましい音頭の声が一帯に響き渡っ



佐藤八幡社

た。神事に続き、境内に善男善女が大勢集い、餅投げに歓声をあげ、甘酒に舌鼓を打った。

その後木遣り連は神輿連となり、毎年10月に行われる例祭日には、氏子町内を練り歩き「ワッショイ、ワッショイ」の勇壮な掛け声と子どもたちの奏でる^{はやし}笛太鼓のお囃子は、祭り気分を盛り上げてくれる。特に巡行後の宮入りは、整然としかも熱気に満ち、観る人に感動と元気を与えてくれる。また、夜には近隣の神社の神輿も加わり校区内のメイン道路で夜間巡行が盛大に行われ、行き交う人々に祭りの最後の余韻を残してくれる。



佐藤八幡社神輿会

諏訪神社分社 諏訪神社本社の鎮座地は、山田町字郷であるが、氏子のつつじが丘一・二・三丁目と神社がJR東海の線路に遮断され、日常の参拝にはやや不便なことから、平成8年11月16日、つつじが丘二丁目に分社を建立した。

諏訪神社は、長野県の諏訪大社の御分霊社で、祭神は^{たけみながたのおおみ}建御名方命を祀っている。永正年間（1504～1521）三州今橋城主牧野成時が創建し、諏訪大明神と崇敬されてきた。永禄2年（1559）には戦乱により荒廃したが、承応2年（1653）10月再興され、享保9年（1724）、時の吉田城主松平伊豆守が、氏子の努力を称賛して除地10箇所と立像を奉納した。明治初年、従来の諏訪大明神を廃し、諏訪神



諏訪神社分社

社と改め今日に至っている。

例大祭は、10月に行われ、厳粛な神事後、もち投げや演芸大会が賑やかに行われる。また、氏子町内を神輿が威勢よく練り歩き、祭り気分は最高潮に達する。

分社では、隣地に建つつつじが丘3町集会所に老若男女が集って祝宴を開き、いっそうの親睦を深めている。

なお、諏訪神社の外部神事への参加として、絹糸・絹布を伊勢神宮へ奉納するおんぞ祭、諏訪大社への代参などがある。

東三ノ輪の神社 三ノ輪町字本興寺にある児童公園の一角の神域に本興神社・秋葉神社・恵比寿大黒様の3社が並んで鎮座している。

本興神社は、昭和27年（1952）10月、東田神明宮よりご神体を受けて現在地に建立された。例祭日は10月第二土・日曜日に行われる。その祭礼は、厳かな神事後、もち投げやお楽しみ抽選会などが行われ、終日賑やかである。また、子ども会が中心になっての獅子舞や神輿が、元気よく町内を練り歩く。地域の祭礼では珍しい獅子舞が、氏子の各家を訪問し、いかめしい獅子頭が大口を開けて御捨りをいただく姿は滑稽だ。巡行の途中、篤志家宅三箇所ですれすれで休憩し、飲み物などをいただいている。

秋葉神社は、以前は市道向山大池線沿いに



三ノ輪町字本興寺の神社

あったが、道路拡幅のため、昭和61年頃現在の地に移転した。

恵比寿大黒様は、町内の内藤源治家に祀られていたが、町に寄進されたもので、昭和53年（1978）4月30日に現在地に移築された。特に例祭日はないが、本興神社の例祭のときにお祓いをされる。

都久夫須麻辨財天大神 三ノ輪町字本興寺にあるこの弁財天は、境内の碑文によれば「大正6年12月建之、佐藤製糸・全男女一同」とある。この製糸工場の創始者は佐藤光太郎で、創業年月は不明だが、おそらく日本各地に製糸工場が造られた明治時代中・後期と思われる。開墾の跡が生々しいこの地に、近代化の象徴である製糸工場が造られたのは意義深い。弁財天は、創始者とここで働く人々が、工場



都久夫須麻辨財天大神

の繁栄を念願して建立したものであり、現在も佐藤家の子孫が大切に守っている。

天理教豊橋分教会 佐藤四丁目にあるこの分教会は、昭和47年3月に老松町から移転した。昭和61年、土地区画整理事業により建物の一部を移動し現在に至る。

天理教は神道13派の一つ。大和の住人中山美伎が天保9年（1838）に天啓神示を受けたのに始まり、その後種々の迫害に耐えて布教伝道を行い、教祖没後にも継承者がよく結束して教勢を拡大、明治41年（1908）に至り、ようやく特立の認可を受けた。（中略）本部は奈良県天理市三島町にある。（小学館日本国語大辞典より）



天理教豊橋分教会

佐藤霊苑 佐藤二丁目にあるこの霊苑について『墓地改葬のことば』（碑）は、次のように記している。

「佐藤霊苑は、我々の先祖が江戸時代中期に、この地に佐藤組墓地として、建之されたものです。以来二百年余りに亘り佐藤組墓地として、雑居のまま管理されて参りましたが、昭和51年地域発展の為に土地区画整理事業が開始され、その事業に関連し昭和56年に墓地委員会を設立、墓地の権利者全員の賛同を得て墓地移転改葬工事を施行いたしましたものです。（後略）」

昭和63年8月に着工し、平成元年3月に完



佐藤霊園

工した霊苑は、面積568㎡、当時の権利者74名の規模であった。周囲をコンクリート塀で囲み、墓石も整然と配置した近代的な霊苑である。なお、当地の教育の先覚者、寺子屋の師匠岡田兵吉の墓もある。

飯村茶屋共同墓地 この墓地は、佐藤三丁目にある。敷地は約500坪、平成18年現在135基の墓がある。墓地が造られたのは、古い墓石の風化の様子からおそらく江戸時代だと思われる。最近まで飯村茶屋の住民だけの墓地として利用されてきたが、土地区画整理事業によって敷地がつつじが丘校区に編入された現在は、やや門戸が開かれている。



飯村茶屋共同墓地

(2) 文化財

ある旅の女人を祀る祠 昔、身重の女が行き倒れ、村人の手厚い介抱の甲斐もなく息を引

き取った。村人は、そこに祠を建て、旅の女人を祀った地藏尊を安置した。村人たちの温かな情が偲ばれる。

古くは、佐藤町字山崎（現佐藤三丁目）にあったが、土地区画整理事業により移転され、現在は、佐藤二丁目にある。信心深い人々によって今でも絶えず花が供えられている。



ある旅の女人を祀る祠

道しるべ（道標） 道しるべは、江戸時代の旅人には無くてはならないものであった。ここに紹介する道しるべは、明治時代に建てられたもので、当時の旅人にはかけがえのない貴重なものであったに違いない。

この道しるべは旧石田町地内にあったが、土地区画整理事業により、現在はつつじが丘二丁目の商店の角地に建てられている。

道祖神像を真ん中に「右小松原道」「左い



道しるべ

わ屋道」と刻まれている。道しるべの裏書によれば、明治30年酉年10月吉日、花田村字石田（現つつじが丘一丁目）に住んでいた廣田勇次郎が、長男岩蔵の出生を祝い、その健やかな成長を願って村に寄贈したものとのことである。この道しるべには、わが子の幸せを願う親心とともに、道行く人の安全を願う勇次郎の温かい心が伺える。

火の見やぐら 三ノ輪町字本興寺の児童公園東北隅にあり、鉄骨造り、高さ約10m、その頂上に半鐘が吊り下げられている。

昭和25・6年頃、当時の消防団関係の方々の防火防災に対する熱意とそれを受け止めた町内会によって建てられた。現在までに2度ほど修理補修されたが、今も白ペンキで塗装され、東三ノ輪町の財産として大切に保存されている。

なお、半鐘は、釣鐘の小形のもので、昔は寺院や陣営での合図に使用したが、後に火の見やぐらの上などに取り付け、火災などの警報に打ち鳴らして用いたものである。この半鐘が何回使われたか定かではないが、住民の安全のために、今も高い所から温かく見守っている。



火の見やぐら

東三ノ輪にあった東海道の松並木と一里塚
昭和20年代まで、東三ノ輪と飯村境を通過して



飯村一里塚跡（三ノ輪町字本興寺）

いた東海道は、幾度もの小規模改修はあったものの、街道の景観はその昔の面影を残していた。しかし、その後、東海道は国道1号として、大規模な拡幅整備が行われ、松は全て伐採された。一里塚も取り壊されたが、現在、国道1号殿田橋のすぐ西に、東三ノ輪の一里塚のあった街道の一部が飛び地として残っている。そこに「飯村一里塚跡・江戸日本橋より73里」（平成6年3月）の碑が建てられている。ここで、東海道の松並木と一里塚の歴史を紹介し、東三ノ輪のその昔を偲んでみよう。

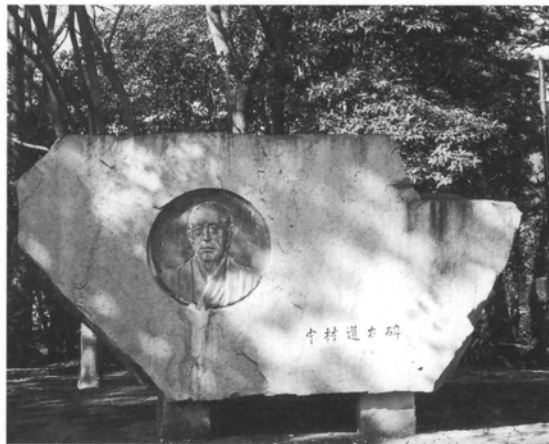
東海道は江戸と京都を結ぶ重要な街道として古くは奈良時代には往来があったが、特に発達したのは、江戸時代に大名の参勤交代の制度が定められてからである。この東海道の両側に、江戸時代初期、街道保護策の一つとして松が植えられた。松並木は、参勤交代の行列や旅人に風情を与え、夏季には、緑陰の下に休息の場を与え、冬季には、風雪から難を防ぐものであったという。一方、戦乱の時、この松を切り倒して、敵の進路を妨げるバリケードのために植えたという説もある。

松並木とともに道端に設けられたものに一里塚がある。古くは織田信長によって始められたといわれるが、慶長9年（1604）徳川家康が秀忠に命じて、江戸日本橋を起点として、36町を1里（約4km）とし、東海道を始め五

畿七道に築いたことは「慶長見聞集」により明らかである。塚は、「当代記」によると、五間四方、すなわち約90㎡というかなり大きなものであった。塚は、街道を挟んで左右に築き、その上にエノキ・松を植えたので一里山、一里松、二本榎などと呼ばれた。地名としても東細谷町に一里山として残っている。**豊橋避病院** 三ノ輪町字本興寺に「豊橋避病院」があったことを知る人は少ない。記録によると、県下でも豊橋が医療の先進地であり、それを支えたのは庶民の力であったことが分かる。ここにその概要を紹介しよう。

明治初期の頃は、一般に衛生思想が低く、コロリ（コレラ）やチブスなどの伝染病に罹っても、できるだけ秘密にして自宅療法をしたため、一旦伝染病が流行し始めると病勢は日増しに広がる一方であった。それを防ぐために、患者を隔離し治療する病院を造った。これを「避病院」という。

明治19年（1886）9月に誕生した「豊橋避病院」は、時の郡長（豊橋は渥美郡の管内であった）や軍人、警察吏など土地の有力者たちが相談の上、それ相応の寄付金や労力奉仕で造りあげた病院である。避病院建設に当たり、東京に居住していた中村道太から壱百円という当時としては巨額の寄付があった。道太は天保7年吉田藩の小役人の子として生ま



豊橋公園にある中村道太の碑

れ、時世を見るに敏であり、早くから当時の先覚者福沢諭吉と親交があった。なお、道太のこうした功績を讃え、後世、顕彰碑が豊橋公園内に建てられた。

当時の豊橋の人たちが衛生面についてかなり進歩的な考えを持っていたことが、避病院ができてから2年後に、普通の病院である「豊橋慈善病院」が、愛知県下最初の私立病院として誕生していることから伺える。

なお、昭和20年(1945)8月の終戦前後には、豊橋でも衛生状態が極度に悪化し、赤痢やチフスが流行した。避病院は入院患者で溢れ、医師、看護婦の不足はもちろん医薬品もほとんど無く、毎日多数の死者が出て悲惨の極みであった。

昭和27年(1952)、豊橋市立三ノ輪病院と改称され、昭和60年頃廃院となった。

4 将来へ向けて 児童の作文より

豊橋市が市制を施行して100年、私たちのまちつつじが丘校区が誕生して10年余、これまでこの校区史で述べてきたように、先人たちのたゆまぬ努力により、現在のつつじが丘校区がある。そして私たちは、つつじが丘校区を、豊橋市をもっと「住みよいまち」「誰からも愛されるまち」にしなければならない。それが今を生きる私たちの使命である。

最後に、つつじが丘小学校児童が、将来こんなまちであって欲しいとの願いを込めながら書いた作文「未来のつつじが丘」を紹介し、本稿の筆を置くこととする。

〔未来のつつじが丘1〕

ぼくは、未来のつつじが丘について考えることが二つある。

一つ目は、家が次々と建てられ、緑がどんどん減ってしまうことです。ぼくの家の前

畑も売り地にされて、鳥も見られなくなりました。町がにぎやかになることはいいことですが、緑が減ることはとても残念です。これからは、緑や鳥などの自然に眼を向けた開発が必要だと思います。

二つ目は、安心・安全な町づくりです。このつつじが丘でも、誘拐という言葉が聞くようになりました。犯罪も増えているそうです。みんなが安心して暮らせる町にしてほしいです。そのためには、みんなが仲良く助け合うことだと思います。

ぼくたちが大人になったとき、このつつじが丘の町がどんな町になっているか、楽しみです。

(つつじが丘小学校平成17年度卒業生 H.K)

〔未来のつつじが丘2〕

つつじが丘は公園が多く、楽しいことが一杯あって、いい町だと思います。大人も子どもも、みんながあいさつをしたら、もっともっといい町になると思います。

朝、交通立ち番のお母さんが、私たちに大きな声で「おはよう」と声をかけてくれます。私もお母さんに負けないように「おはよう」とあいさつをします。

「おはよう」とあいさつをしたとき、「おはよう」と明るいあいさつがかえってくるとうれしくなり、また、明日もあいさつをしようと思います。あいさつがかえってこないと、少し悲しくなります。だから、町中いっぱいあかるいあいさつを、みんなですていきたいと思います。

あいさつをすると、みんな仲良しになれると思います。未来のつつじが丘が、あいさつのできる明るい町になったらいいな。

(つつじが丘小学校平成17年度卒業生 R.H)

年表

(校区のあゆみ)

年 度	つつじが丘校区	つつじが丘小学校	豊 橋 市
平成7年	4. つつじが丘校区創立記念式典 市民館開館式	4. 開校記念式典 5. 開校記念植樹(ナラの木2本) 2. 校歌「夢かなうその日」発表	10. 世界公園フェスティバル95開催
平成8年	8. 納涼祭 9. 体育祭 11. 文化祭 1. 成人式	9. 6年生体験学習「カッター訓練」 12. スリランカ、中国、インドネシアの方と国際交流	4. 豊橋総合動植物公園オープン 5. 新市民病院開院 6. 市役所新庁舎完成 3. 豊橋駅完成・ステーションビルオープン
平成9年		7. 女子水泳地区大会優勝	4. 母子保健センター開設
平成10年	11. 校区交通安全推進大会 (県警音楽隊の演奏ほか)	6. 寄贈された和太鼓披露の会 7. 男子水泳地区大会優勝 10. 生き物とのふれあい「わくわく池」完成	
平成11年	9. 竜巻発生 つつじが丘一〜三丁目 に被害。 避難所を校区市民館に開設 11. 校区交通安全大パレード	6. 中学校と小学校の交流「東部中学校のわ」発足 10. 親子・地域・老人会との触れ合い活動「日曜学級」開設 11. 校区交通安全大パレードに参加 3. 校内に「児童クラブ室」完成	4. 中核市移行(全国で22番目)、保健所開設 6. 路面電車サミット'99 in とよはし開催 10. ドイツのシュレーダー首相が公賓として来豊 11. 豊橋エコテクノフェア'99開催
平成12年	5. 「幸公園を愛する会」発足	6. 校区のゲストティーチャーによる授業「東部中学校のわ」開設 10. 陸上競技大会優勝 研究発表会「互いに認め合い、高め合う子の育成」	4. 米国・オハイオ州トリード市と姉妹都市提携 6. ドイツ・ハノーバー万国博覧会フスブルグ協賛会場出展 11. ジャパンフラワーフェスティバルあいち in とよはし開催
平成13年		11. あいさつ励行「あいさつサミット」 「東部中学校のわ」開設	5. ボランティア情報センターがカリオンビルにオープン 2. JR二川駅の新駅舎オープン
平成14年		5. 校区をきれいに「幸公園ごみゼロ運動」 11. 森林の恵みに感謝「植林体験」 幸公園にメダカの放流	4. 資源化センター新焼却炉施設しゅん工 12. 豊橋市出身の小柴昌俊さん(東京大学名誉教授)がノーベル物理学賞受賞
平成15年	5. 幸公園「触れ合いフェスティバル」	5. 幸公園「触れ合いフェスティバル」に参加 7. 校区防災訓練に初参加 2. 「国際森林環境フォーラム2004 in 新城」 参加体験	4. 三河港が「リサイクルポート」に指定 5. 三河港が「国際自動車特区」に認定 6. 小柴昌俊さん来豊。「豊橋市民栄誉賞」を贈る 1. 総合福祉センター「あいトピア」オープン
平成16年	7. つつじが丘校区防災訓練、ドクター ヘリが参加 11. 校区10周年記念式典	6. 陸上競技大会男子優勝 10. バスケットボール部男女優勝・サッカー大会優勝 11. TKB県大会入賞、東海大会出場 2. 開校10周年記念式典、記念誌発行	9. 豊橋ブラジル人協会設立 10. 豊橋市・豊川市消防通信指令業務共同運用 開始 3. 豊橋医療センター開院
平成17年	4. 「つつじが丘防犯パトロール隊」 (青色回転灯)発足 5. 防犯まちづくり重点地区指定 11. 市ソフトボール大会女子優勝	10. サッカー大会優勝 11. TKB第31回マーチングバンドトワリング東海大会銀賞 第9回東海小学校バンドフェスティバル優秀賞	4. 二川宿本陣資料館旅籠屋「清明屋」リニューアル オープン 5・6 愛・地球博長久手会場で豊橋市の日開催 7. カモメリア(神野ふ頭町)オープン
平成18年	11. 市制施行100周年記念事業「地域イベント」実施 12. 市制施行100周年記念事業「校区史」刊行	8. 水泳競技地区大会男子優勝、女子優勝 9. 学校図書支援センター推進事業協力校	8. 市制施行100周年記念式典

(歴代の総代など)

(敬称略)

	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年
市議会議員	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治	石倉 健治
校区総代会長	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	白井 栄一	白井 栄一	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	白井 栄一	白井 栄一
つつじが丘一丁目	宮下 秋保	齋藤 三吉	齋藤 三吉	齋藤 三吉	齋藤 三吉	齋藤 三吉	市原 政弘	市原 政弘	市原 政弘	市原 政弘	青木 義雄	青木 義雄
つつじが丘二丁目	松岡 繁雄	松岡 繁雄	松岡 繁雄	松岡 繁雄	松岡 繁雄	松岡 繁雄	山本 圭三	山本 圭三	山本 圭三	山本 圭三	山本 圭三	山本 圭三
つつじが丘三丁目	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫	松野 巖夫
佐藤一丁目	村田 孝雄	村田 孝雄	村田 孝雄	村田 孝雄	村田 孝雄	村田 孝雄	村田 孝雄	村田 孝雄	村田 孝雄	鈴木 俊宏	鈴木 俊宏	鈴木 俊宏
佐藤二丁目	高橋 徳也	高橋 徳也	山本 孝	山本 孝	本多 明男	本多 明男	本多 明男	本多 明男	本多 明男	本多 明男	本多 明男	本多 明男
佐藤三丁目	原田良作郎	加藤 博	加藤 博	加藤 博	加藤 博	加藤 博	加藤 博	加藤 博	加藤 博	加藤 博	加藤 博	加藤 博
佐藤四丁目	山田 重隆	山田 重隆	白井 克己	小笠原 靖	白井 克己	竹本 篤郎	竹本 篤郎	竹本 篤郎	夏目 智弘	夏目 智弘	夏目 智弘	夏目 智弘
佐藤五丁目	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一	白井 栄一
サウナ・お遊園地	守屋 保満	守屋 保満	守屋 保満	西尾 一弘	本間 昇	本間 昇	本間 昇	本間 昇	本間 昇	本間 昇	綾 正之	綾 正之
東三ノ輪	河合 邦夫	田中 健二	伊藤 光男	伊藤 光男	伊藤 光男	伊藤 光男	伊藤 光男	山田 義則	山田 義則	伊藤 善朗	伊藤 善朗	山本八十八
オノ神	伊藤 茂	伊藤美奈子	伊藤美奈子	伊藤美奈子	伊藤美奈子	伊藤美奈子	伊藤美奈子	伊藤美奈子	伊藤美奈子	伊藤美奈子	伊藤美奈子	西村 明
小学校長	稲垣 全勇	稲垣 全勇	稲垣 全勇	中村 哲	中村 哲	中村 哲	中村 哲	小林 一弘	小林 一弘	小林 一弘	小林 一弘	小林 一弘
PTA会長	福井 英輔	藤川 和秀	後藤 貞夫	神藤 寿昭	夏目 智弘	大谷 勇	仲井 慎治	光部 英司	松野 匡記	和田 廣	鈴木 淑由	広田 智保

参 考 文 献

- ・福東完工誌（福岡東部土地区画整理組合編）
- ・とよはしの歴史（豊橋市）
- ・豊橋70年（東愛知新聞編）
- ・豊橋の町名の変遷（豊橋文化協会編）
- ・愛知県災害誌（愛知県）
- ・竜巻の記録（豊橋市）
- ・豊橋教育の源流（夏目定寛編著）
- ・とよはしの巨木・名木（豊橋市）
- ・東部中風土記（東部中学校編）
- ・福岡むかしと今（福岡小学校編）
- ・福岡校区史（福岡小学校編）
- ・とよおか誌（豊岡中学校編）
- ・ふるさとみゆき（幸小学校編）
- ・みゆき（幸小学校編）
- ・岩西小50周年記念誌（岩西小学校編）
- ・マイタウン岩西（岩西小学校編）
- ・日本国語大辞典（小学館）
- ・佐藤村戸籍帳（岡田奈興所蔵）
- ・マイタウン岩西一岩西地誌

編 集 後 記

「つつじが丘校区史」の編集に携わって約2年、ここに、この校区史を発刊することができ、編集委員一同感無量です。

つつじが丘校区が誕生して10年、創生期から充実期に入りました。いつの時代でも、その時代の出来事を、文献として次世代に残すことは現代の責任だと思います。その大切な仕事を任された責任の重さに、筆が進まないこともありました。一方、責任ある大役に選ばれたという自負が支えとなってやっとの思いで書き終えることができました。

執筆にあたっては、分離新設された校区のため、資料などが少なく、昔から在住している方々からの聞き取りから始め、関係のある周辺の学校や施設、市役所等から資料の提供を頂き、ようやく脱稿に漕ぎつきました。

つつじが丘校区として最初のこの校区史が、これからの「つつじが丘」の校区造りの一助になればこの上ない喜びです。

最後になりましたが、多くの方々から暖かい励ましの言葉やご助言を頂き、微力ながら責任を全うすることができましたことを、編集委員一同深く感謝するとともに、心からお礼申し上げます。

つつじが丘校区史編集実行委員

編集委員

本多明男 夏目智弘 山本圭三 松野巖夫 鈴木俊宏 片岸初江

協力者等（順不同敬称略）

白井克己、廣田はま、野口泰広、白井茂行、星野寿雄、杉山富夫、中川六郎、野澤可平、亀田邦雄、石倉健治、鈴木宣男、鳥居直行、佐野七郎、佐藤徳利、校区各町総代、校区各種団体、校区内各施設、（財）松操学園、（更）東三更生保護会、つつじが丘小学校、福岡小学校、岩西小学校、栄小学校、東部中学校、中部中学校、佐藤八幡社、佐藤八幡社神輿会、山田町諏訪神社、清水コンサルタント（株）、豊橋市役所

サポーター

仲井慎治、佐藤実

校区のあゆみ つつじが丘

平成18年12月25日発行

編 集 つつじが丘校区総代会
つつじが丘校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会

印 刷 株式会社 きょうせい

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋